

Hans-Jörg Ronsdorf

良い知らせとは何か、
私たちにとって何を意味するのか

シンプル。
明快。



神の 良き福音

神の良き福音

良い知らせとは何か、それは私たちにとって何を意味するのか

Hans-Jörg Ronsdorf

奥付

神の良き福音（Gottes gutes Evangelium）—— 良い知らせとは何か、それは私たちにとって何を意味するのか

改訂新版2026年。無料ダウンロード：www.hans-joerg-ronsdorf.de

印刷版第5版（2021年11月）は、ISBN 978-3-9820715-0-3 で刊行されました。

© Hans-Jörg Ronsdorf——無断転載を禁じます。本文を変更しないかぎり、他の人に渡すことを大いに歓迎します。

Hans-Jörg Ronsdorf, Albis 6 1/2, 87477 Sulzberg

メール：hj-ronsdorf@t-online.de

ホームページ：www.hans-joerg-ronsdorf.de

目次

三つの言葉と一つの物語	7
福音	7
神の福音	10
だれが福音を必要としているのか	11
罪？	13
自由——強制ではない	16
どうしてこうなってしまったのか	17
このままであってはならない	19
御国の福音	20
この知らせはどのようにして私たちに届いたのか	20
神の王としての支配とは何か	22
神の支配——すべての人にとって最善のもの	23
神の御子の福音	25
王と十字架	28
王殺し	28
予想とは違って	31
神の視点から見た十字架	32
私たちのためにささげられた	33
神はいけにえを必要とするのか	35
善をもって悪に打ち勝つ	38
神の限りない知恵と力	40
十字架が私たちに与えるもの	42
十字架、それは愚かなこと	43
家に帰る	45
神の恵みの福音	45
初めから終わりまで恵み	48
神は愛です	51
見えない世界——闇の力	54
諸力と人間	55
福音と諸力	56
諸力と神の救いの計画	57
十字架の勝利	59
自由は可能です	60

平和の福音	60
福音——成就した約束	62
福音の希望	64
神の新しい世界の夢	67
福音——救いをもたらす力	69
福音に従う	70
イエスの弟子になる	71
弟子としての歩みを始める	72
従う生き方とはどのようなものか	73
福音を無視する	77
すべてが明るみに出る	77
神の怒り	79
永遠のいのちと地獄	81
異なる福音	83
福音ではないもの	85
終わりに	86
これからどうするか	87

おめでとうございます！ この本は、あなたの注意を引くことに成功しました。どうか手元に置いてください。読んでください。神があなたに出会おうとしておられるのかもしれません。たとえ、あなたがすでに福音を知っている——あるいは知っているつもりでいても。読む時間を神が祝福してくださいように。読む価値は十分にあります。

まず一度、通して読んでみてください。二度目には、脚注にある聖書の箇所を、聖書を開いて読んでみるができます。

福音とは何か。それを示すのは聖書だけです。私はそれを、できるかぎり、そして手短にまとめました。

三つの言葉と一つの物語

福音は一つの物語です。私たちの物語ではありません。ナザレのイエスの物語です。ベツレヘムで始まり、エルサレムで終わる物語です。信じがたい物語です。それでも、多くの人に信じられています。この古い物語が、数えきれないほどの新しい物語を書いてきたからです。このイエスの物語が自分に何をしたのか、多くの人が証ししています。彼らは新しい人になりました。希望と未来を持つ人になったのです。

福音とは、まさにイエスの物語です。三つの言葉にまとめると、それはこうなります。

イエスは主である。¹

この方は王である。²

宇宙を治める王。すべての人、すべてのものを治める王。正義と愛をもって治め、赦し、すべてを新しくされる王。これが良い知らせです！ 使徒たちは、これを宣べ伝えました。初めからイエスと共にいた弟子たちです。彼らはイスラエルと全世界に向けて、これを告げ知らせたのです。

これについては、もっと語るべきことがあります。それは次のページから見ていきます。この三つの言葉を覚えておいてください。これが中心のメッセージです。これが良い知らせの心臓部です。それは私たちすべてに関わります。個人的にです。ほかの人のことではありません。私たちのことです。私のことです。そして、それは私たちの惑星全体、私たちの住まいにも関わります。やがてわかるでしょう。この本を、あなた個人に宛てられた知らせとして読んでください。

福音

キリスト者は福音について語ります。福音こそ、キリスト者をキリスト者たらしめるものです。少なくとも、そうあるべきです。それは彼らのアイデ

1. 使徒の働き2章36節、4章24節、11章20節、15章17節

2. 使徒の働き17章7節、テモテへの手紙第一6章15節、ヨハネの黙示録17章14節、19章16節

ンティティーの一部です。福音がなければ、彼らは無に等しい存在です。意味のない存在です。塩けをなくした塩のようなものです。

福音は彼らの秘密です。彼らの宝です。彼らの薬です。霊的で、暴力を用いない彼らの武器です。これに匹敵するメッセージを持つ者は、ほかにだれもいません。

「福音」という言葉は、聖書の中にたびたび出てきます。しかし、この言葉が初めて使われたのは聖書の中ではありません。聖書や教会が作り出した敬虔な造語ではないのです。イエスの時代やそれ以前には、日常の言葉の一つでした。良い知らせという意味です。喜びと安堵をもたらすうれしい知らせのことです。何か良いことを告げる知らせです。³さまざまな喜ばしい出来事の際に、人々は「福音」を届けました。紀元前63年に、皇帝アウグストゥスが生まれました。後にその誕生日は、ローマ帝国全体で良い知らせとして祝われました。彼は自分を「神の子」と称しました——この称号は、その後多くの皇帝に用いられることになります。この皇帝アウグストゥスについての「福音」から、いくつかの文を紹介しましょう。

「この日は世界に別の顔を与えた。もしこの方の誕生によってすべての人のために救いが輝き出なかったならば、世界は滅びていたであろう。世界の救いのために、この人は多くの賜物に満たされ、私たちと後に続く世代のために救い主として遣わされた。あらゆる争いは今や終わり、彼はすべてを栄光に満ちたものとするであろう。父祖たちの望みは成就した。これより偉大な者が現れることなど、ありえない。彼の誕生とともに、新しい暦が始まる。」⁴

その700年前に、古の預言者イザヤはこう語っていました。なんといい喜びだろう！ 山々を越えて、勝利の使者が急いでやって来る！ 彼は良い知らせを携え、平和と救いを告げ知らせ、シオンの町に言う。「あなたの神は全世界の王である！」⁵

3. ルカの福音書1章19節

4. 小アジアのプリエネ暦碑文（紀元前9年）。短縮し、自由に訳したもの。

5. イザヤ書52章7節



イザヤが語っているのは、生ける神のことです。永遠なる方です。すべてを造られた方です。歴史の主です。一人の人間のことはありません。自称「神の子」のことでもありません。皇帝の誕生の告知は、うれしい知らせでした。けれども、どの支配者が、世界が本当に必要としているものをもたらすのでしょうか。すべての人が心の奥底で切に求めているものを、です。

「福音」は、戦場からの知らせでもありました。勝利を勝ち取り、敵が打ち負かされたときの知らせです。これは、キリスト教の福音とぴったり一致します。福音とは、勝利についての良い知らせです。神の御子、十字架につけられ、よみがえらされた方、イエス・キリストによる神の勝利の知らせです。神は降伏されませんでした。神はご自分の世界のために戦っておられるのです！

十字架の死、よみがえり、そして神の御座への高挙によって、イエスは世界の主となり、救い主となりました。この方にすべての権威が与えられています。この方こそ宇宙の支配者です。⁶ 宇宙はこの方のものです。この方は王の王であり、すべての人に赦しと永遠のいのちを差

6. マタイの福音書28章18節、使徒の働き2章36節、エペソ人への手紙1章20～23節

し出しておられます！⁷私たちのためにすべてを懸けてくださった王です。私たちを愛してくださる王です。自分の利益を求めず、下心も持たないので、ためらうことなく身をゆだねることのできる王です。この方は、あらゆる栄誉を受けるにふさわしい方です。この方は再び来られます。しかし、それについては後で詳しく述べましょう。

これが、手短かに言えば福音です。いちばん大切なことです。よく考えてください。覚えておいてください。決して忘れないでください。

キリスト者にとって、イエスを王として証しすることは、今日でも危険を伴うことがあります。いくつかの国では実際に危険です。この王⁸をあがめることが、支配者や皇帝や王たちに疑問を突きつけることだと受け取られかねないからです。政治的な意図はありません。従順から出ることです。イエスへの忠誠は、しばしば彼らに迫害と死をもたらしました。なぜなら、彼らのイエス、そして私たちのイエスは、地の王たちの支配者だからです。⁹ この方は王たちの上に立っておられるのです！

しかし、良い知らせを殺すことはできませんでした。そこには、よみがえられた主でありキリストである方が生きておられたからです。良い知らせには、ローマ帝国をひざまずかせるほどの爆発力がありました。剣によってではありません。福音の、人を変える恵みと力によってです。

神の福音

福音はどこから来るのでしょうか。すべては神から始まります。三位一体の神、父と子と聖霊から始まるのです。神こそ、福音の考案者です。福音は神の心の中で生まれました。神の永遠の愛から生まれたのです。地球や人間が存在する前から、すでにそうでした。¹⁰ 福音に含まれるすべては、神から来ています。¹¹ ただ神おひとりからです。それは神の福音なのです。ですか

7. ルカの福音書24章47節、使徒の働き2章38節、5章31節、10章43節、13章38節、26章18節

8. 使徒の働き17章7節

9. ヨハネの黙示録1章5節

10. ローマ人への手紙16章25節、テモテへの手紙第二1章9節

11. コリント人への手紙第二5章18節

ら、それは真理です。確かなものです。信頼に値するものです。その上に人生を築くことができます。¹² 神は真実な方だからです。¹³ 神は偽ることがありません。¹⁴ 神が福音の中で約束し、保証しておられることはすべて有効であり、必ず実現します。それは、私たちが何の留保もなく信頼できる神の約束です。福音は、神が自ら進んで与えてくださったものです。限りない愛から出たものです。神がそれを望まれたのです。ご自身を与えることは、神の喜びです。それが神の楽しみなのです。神はそこにおいてご自身の栄光を現されます。¹⁵ すべての栄誉は神のものです。¹⁶

神ご自身が、良い知らせを届けてくださいます。それは神の使命（ミッション）です。神は行動し、働き、語られます。良い知らせは、まさにそれを必要としている世界にやって来ます。神ご自身は何も必要とされません。神には何も欠けていません。神は完全な方です。それでも、神の心はあふれ出ます。神は愛であるので、愛されるのです。神は、史上最大の「連れ戻し作戦」を開始されます。神は私たち人間を取り戻したいのです！ 神は家族を持ちたいのです！¹⁷ なぜなら、私たちは生まれたままの状態では、神の子どもではないからです。私たちはみな、神の子どもになるべきなのです。だからこそ神は、私たちにご自分の愛と心遣いを注ごうとしておられます。私たちが永遠に神と共に生きるためです。

だれが福音を必要としているのか

神の知らせが届く世界は、もはや神が初めに造られたときの世界ではありません。神が思い描いておられた世界でもありません。あなたは どう 思いますか。神が私たちの世界に介入されることは必要でしょうか。それとも、私たちは神なしでやっていけるでしょうか。

12. マタイの福音書7章24節

13. テサロニケ人への手紙第一5章24節、ヘブル人への手紙10章23節、ペテロの手紙第一4章19節

14. テトスへの手紙1章2節、ヘブル人への手紙6章18節

15. エペソ人への手紙1章6、9、12、14節

16. ヨハネの黙示録5章11～14節

17. 詩篇103篇13節、イザヤ書64章8節、マラキ書2章10節、ヨハネの福音書14章2節、ヘブル人への手紙2章10節、ヨハネの手紙第一3章1～3節

私たちの世界を、正直に、そして偏りなく見てみましょう。

神の知らせが届くのは、内面が打ち砕かれ、希望を失っている人々です。多くの場合、もう出口が見えない人々です。良心が罪責感に苦しめられている人々です。何がどう違っているべきか、違っていることができたのかを知っている人々です。不安を抱え、落ち着かず、むなしく、病気で、縛られている人々です。神の知らせが届くのは、だれもが死んでいく人々です。¹⁸ 将来に不安を抱く人々です。

人類の大部分は貧困の中で暮らしています。毎日、生き延びるために闘っています。多くの人が取り残されていきます。

神の知らせが届くのは、結婚、家庭、仕事、社会の中で挫折した人々です。自殺を最後の手段と考えている人々です。

同じように、神の知らせは、問題がほとんど、あるいはまったくない人々にも届きます。豊かな国や裕福な家庭に育つ幸運に恵まれた人々です。経済的に自立している人々です。けれども、健康と豊かさがあるにもかかわらず、無意味さと内面のむなしさに苦しんでいる人々です。

まだ克服されていない病気やウイルスが、私たちのいのちを脅かしています。自然は、いのちを危険にさらす一面を見せています。

人はだれでも、問い、心配、苦しみからなる一つの小さな宇宙です。そして、愛と意味と赦しと支えを求めて叫んでいます。たとえそれが、忙しさや気晴らしの下に隠され、あるいは押し殺されているとしても。

福音が届くのは、互いに戦争をしている国々です。争いと不和の中で暮らしている人々です。福音が届くのは、不正が当たり前になっている世界です。今日に至るまで、人が人を奴隷にし、搾取している世界です。互いに差別し合う世界です。最も弱い者が犠牲になる世界です。子どもたちが働かなければならず、女性たちが搾取される世界です。人権が国家ぐるみで組織的に踏みこじられている世界です。

18. ローマ人への手紙5章12～14節、6章23節

多くの人にとって、世界は苦しみに満ちた場所であり続けています。この列挙を読みながら、あなたはとくに、すべてがそれほど悪いわけではない、良いこともたくさんある、と思っていたことでしょう。多くのことは実際に良くなってもいます。あなたの言うとおりです。問題は、偏った見方や悲観的な世界観ではありません。問題は、私たちが神と神の福音を必要としているかどうか、なのです。

私たちには、この良い知らせが必要です！ この認識には、いつでも至ることができます。そして、この福音を自分自身のものとして受け取ることができるのです。多くの人がそのことに気づきました。時には、つらい経験を通してです。挫折、崩壊、病気、苦しみを経て初めて、その認識に至った人々もいます。神は沈黙しておられません。こうした困難な、しばしばいのちを脅かす経験は、私たちに届くための神のメガホンなのです。¹⁹

罪？

現代的な言葉ではありません。魅力がなく、誤解されている言葉です。しかし、それは聖書の見方の一部であり、物事の原因についての聖書の説明の一部です。望ましくないことすべて、失敗、崩壊、敵意、混沌の原因を、私たちはどう説明するのでしょうか。

聖書は、人間を描くときにはっきりと語ります。人間がどのように生まれ、どのように成長し、どのように生きるのか。人間が周りの人々に対してどのように振る舞うのか。そして神に対してどうなのか。聖書は率直に語ります。遠慮はしません。容赦なく正直です。聖書は、私たちが罪人だと言います。²⁰ すべての人がです。例外はありません。私たちはみな罪人なので、罪を犯すのです。このように包括的に、区別なく断定するのは、聖書の世界観だけです！ すべての人が例外なく罪人だと主張する宗教は、ほかにありません。

19. メガホンのたとえば、C・S・ルイス (C. S. Lewis) の「Über den Schmerz」(『痛みの問題』) によるものです。

20. エペソ人への手紙2章1節

罪とは、私たちがすることだけを指すものではありません。私たちが何であるかをも指しています。残念ながら罪は、腫瘍のように私たちの中で切り分けて取り除くことができません。これ以上悪いことはほとんど考えられません。私たちは罪の力に捕らわれているのです。それは、一つの過ちよりもはるかに重大なことです。罪は、個々の悪い行いの寄せ集めにすぎないのではありません。罪は能動的で悪意に満ちた力であり、私たちの存在に浸透し、それを占領しています。それは大惨事です。なぜなら、私たちは罪によって神の永遠の愛から切り離されているからです。神の愛は、私たちには手の届かないものとなっています。罪と神とは決して相いれません。

罪とともに死が来ました。避けられない結果としてです。私たちが受けるに値する報酬のようにです。私たちは、自分で蒔いたものを刈り取ります。罪と死は、だれも逃れることのできない普遍的な力です。

支配する力としての罪は、私たちの人格を有害な仕方で形づくりします。罪は私たちを完璧主義者にし、他人の幸せが問題になると臆病でためらう者にします。隣人の幸せであっても、アフリカで死にかけている人の幸せであってもです。また、自分の利益が問題になると、私たちが自己中心的な者にします。罪は私たちを、ナルシシスト、詐欺師、依存症者、陰謀家、狂信者、姦淫する者、性暴力の加害者にします。この列挙は、どこまでも続けることができるでしょう。

しかし私たちは、捕らわれ人や病人であるだけではありません。受け身の被害者であるだけではないのです。むしろ私たちは、罪の能動的な、強制的に徴用された手先になってしまったのです。私たちは罪の代理人として、罪の道具として、自分を差し出してきました。それは単なる捕囚ではありません。能動的な共犯関係なのです。

罪と神との関係を見無視しているかぎり、罪の本質は私たちには隠されたままです。罪は、抑えつけたり、制御したりできる、あるいはそうしなければならぬ、人間の生活の中の一現象にすぎないのではありません。聖書は罪を、無秩序、敵意、反逆、神への不従順として描いています。神なしの人間

は、改善を必要とする単なる不完全な被造物ではありません。武器を捨てなければならぬ反逆者なのです。降伏こそが唯一の出口です。

このような最大級の告発にもかかわらず、どうか読み進めてください！

人間の生にとって根本的な関係——私たちと神との関係——が壊れています。この壊れは、私たちが互いに結ぶほかのあらゆる関係の中に現れます。私たちが罪人であるのは、個人的に、あるいは一人だけでそうなのではありません。私たちは、罪から逃れることのできない地球規模の人類に属しているのです。

聖書のこの診断こそ、私たちの救いなのです！ 断罪ではありません！

もしあなたの主治医が、あなたの致命的な病気についての正直な診断を隠していたとしたら、あなたはそれを喜ぶでしょうか。ましてや、その医師が同時に、病気に打ち勝つ薬や手術を約束することができるとしたら、なおさらではないでしょうか。

神の診断を理解し、受け入れることは、ほとんど不可能です。私たちは自分のことを例外だと考えたがります。あるいは、事の深刻さを軽く見てしまいます。

こうして福音は、多くの問題を抱えていながら、奇妙なことに神の救いの知らせにほとんど関心を示さない世界に届くのです。一つの逆説です。それでも神は、この惑星、ご自分の惑星で起きていることに無関心ではありません。福音は、神がこの世界のために戦っておられることの証拠です。苦しみや悪や死が、最後の言葉を語ることがあってはなりません。神は愛だからです！²¹

最初の問いへの答えはこうです。私たちは、神の子どもになるために福音を必要としているのです。

罪に対する神の嫌悪、人が考え行ふ悪——大きなことでも小さなことでも——に対する神の嫌悪は大きなものです。罪が私たちを滅ぼすからです。神は愛であり、私たちが救いたいと願っておられるからです。罪に対するこの

21. ローマ人への手紙5章8節、ヨハネの手紙第一3章1節、4章7～11節

神の嫌悪と断罪は、「神の怒り」の中に具体的に表されています。²²

神は、私たちが加害者としてそれと一体となっている悪を断罪されます。それと同じほど強く、神はすべての人をそこから解放したいと願っておられるのです。

自由——強制ではない

この栄光に満ちた福音²³にもかかわらず、神は人間に「はい」と言うことを強制されません。本当の愛は、自由を土台としてしか存在しないからです！選択の自由と責任は、人間の本質であり続けます。人間はそうのように造られたのであって、ほかのようにではありません。

しかし、罪人である人間は、もはや中立ではありません。罪は人間を無力にし、自分の力で福音を受け入れることができない者にしてしまいます。自分が罪人であると自覚することは、人間的に見れば不可能です。けれども、福音には力があります。福音は、自分自身と神に対して目を開かせます。心と良心に光を与えます。神は、この決断において人間を独りぼっちにはされません。人間の心は、激しい争奪戦が繰り広げられる戦場です。神は人の心を勝ち取ろうとしておられます。そして、和解を差し出すその姿勢によって、人を納得させ、光を与えようとしておられるのです。

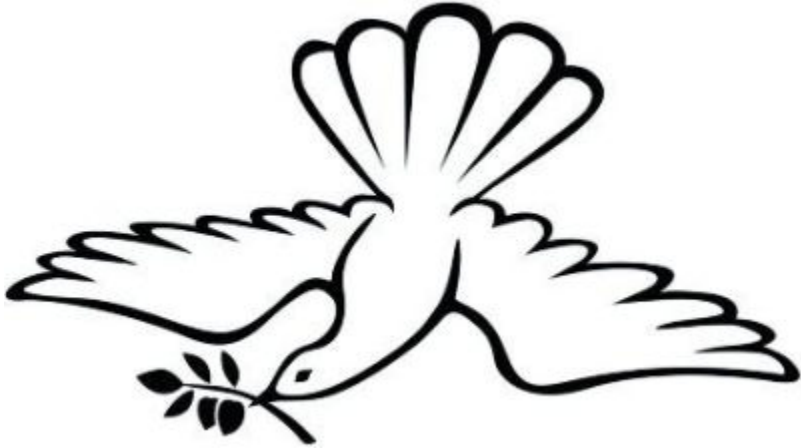
人を救う神の創意工夫は、計り知れません。神はどんな状況も、どんな時も、どんな場所も用いて、ご自分の聖なる臨在によって罪と失われた状態への自覚を呼び覚まし、同時に救いと救出を与えることがおできになります。

こうした輝かしい瞬間には、決まりもひな形也没有ありません。そのようにして起こってきました。そのようにして今も起こります。そのようにして、今、あなたにも起こりうるのです。神がどれほど不思議に、思いがけなく、神秘的に、愛に満ちて、あるいは劇的に自分の人生に入って来られたかを、多くの人が語っています。

22. ヨハネの福音書3章36節、ローマ人への手紙1章18節、5章9節、エペソ人への手紙2章3節、5章6節、コロサイ人への手紙3章6節、テサロニケ人への手紙第一1章9～10節

23. コリント人への手紙第二4章4節

神の知らせは、悔い改めよという緊急の命令です。²⁴ それは私たちの益のためです。しかし、それにどう応えるかについては、人間自身に責任があります。



どうしてこうなってしまったのか

人間は、地上における神の代理人として造られました。神のかたちとして造られたのです。創造主と共に、地を心を込めて管理し、治めるためです。見渡せるほどの広さの場所であった楽園の園は、地の全体へと広げられるはずでした。神は父であり、すべての人間は神の家族です。²⁵ 初めから、そのように考えられていたのです。

人間は、本当の意味での意志の自由をもって造られました。神の愛を受け取り、それに応え、それを人に分け与えるためです。そのように創造主と共に生き、働くことは、夢のようなことです。すぐそばで。神の守りと祝福のうちに。

ところが、あのとき、初めのときに、人間は別の道を選びました。人間は、自分たちに与えられた特別な住まいである楽園の園を守りませんでした。誘

24. 使徒の働き17章30節

25. イザヤ書63章16節、64章8節、ルカの福音書3章38節、使徒の働き17章28～29節

惑者が入り込んできたのです。狡猾な蛇です。その蛇の背後には、かつて輝いていた神の御使いが隠れていました。この御使いは神から離れ、反逆し、罪に陥っていたのです。悪魔であるサタンは、この考えを人間に売り込もうとしました。悟りを得ることとして、より良い、より自由な生き方への進歩として。

人間は、創造主の良い教えに従いませんでした。神のようになること——それが悪魔の誘惑であり、甘い誘いです。こうして人間は、良い神の、一つの単純な戒めを軽んじました。もしかすると、神が何か良いものを自分たちに与えずにおいたのではないかと恐れたのでしょうか。²⁶

人間は、この一步のために大きな代償を払いました。物事は、もはやあるべき姿ではなくなりました。人間は樂園を失いました。死と、はかなさ——**霊的にも肉体的にも**——が人間の生の中に入り込んだのです。²⁷ 死は広がっていきました。遺伝する病のように、すべての子孫に受け継がれていきました。その子孫の中に、私たちもいるのです。

それは遠い昔のことです。けれども、どういうわけか、そのままの状態が続いています。今日に至るまで。何千年もたった今も、私たち人間は創造主なしで人生を形づくっています。自分で決めながら。まるで神などいないかのよう。私たちは、自分のほうがよくわかっていると思っています。私たちは創造主を忘れてしまいました。そして、一見もっと魅力的に見える神々を見つけたのです。というのも、人間には生まれつき、宗教的であり、何かに頼り、何かを信じようとする性質があるからです。それは、この世界のさまざまな宗教が示していますし、現代人の振る舞いや、お金、権力、性といった代わりの神々も示しています。神なしで、私たちは今、自分の欲求を満たさなければなりません。大きな規模でも小さな規模でも、飽くことのない食欲は、自分自身の中で迷子になった心の表れです。私たちは自分自身の中に捕らわれ、何か本質的なもの、意味を与えてくれるものを失ってしまったことに気づいています。私たちは、いのちの泉²⁸である創造主を捨てたので

26. 創世記3章

27. ローマ人への手紙5章12～21節

28. 詩篇36篇9節、箴言14章27節、エレミヤ書2章13節、17章13節

す。創造主との関係がなければ、被造物との健全な関係も乱れてしまいます。人間は多くの場所で、自分たちが住んでいる家を壊しています。神と共に、互いに、そして被造物と共に、実り豊かで祝福された人生を送るために与えられた神の良い戒めを、私たちは拒んでいるのです。

律法や戒めは暴君から来るものだ、としばしば結論づけられます。私たちを支配し、統制し、窮屈にしようとする神から来るものだ、と。しかし、多くの人は、本当の神を知らないのです。

私たちの最善を願ってくださる良い父を。

このままであってはならない

神は、墮落した世界を追い求められます。あらゆる問題や火種を抱えたままの世界を。神はこの世界を見捨てられません。²⁹ 大きなことでも小さなことでも、さまざまな激しさで現れる悪は、単なる一つの問題ではありません。それは初めから、存亡に関わる危機なのです。生きるか死ぬか、です。エデンの東で生き延びること——それが私たちの存在の地平です。この危機と、自分たちの行いのあらゆる結果の中で、私たちはそれ以来生きてきました。それが何を意味するのかを、私たちは毎日目の当たりにしています。神なしでは、良い結末はありません。神なしでは、行き着く先は暗闇です。私たちは霊的、道徳的な闇の中をよろめき歩いています。道も目的地も知らないのです。

福音——裁きや断罪ではありません——こそ、イエス・キリストにおける神の答えです。福音は、悪に打ち勝つための神の基本計画（マスタープラン）です。下降の悪循環を食い止め、光といのちと希望を闇の中にもたらすための計画です。³⁰ 自由と平和と喜びが戻ってくるためです。³¹ すべての人のために。そして、あらゆる悪いことから、なおも良いことが生まれるため

29. ヨハネの福音書3章16節

30. 詩篇27篇1節、43篇3節、イザヤ書9章2節、60章1節、マタイの福音書4章16節、ヨハネの福音書1章4～9節、3章19～21節

31. ルカの福音書2章10節

す。³² 神が再び家族を持つためです。そして、私たちが神の子どもになることができるためです。それは、私たちに起こりうる最善のことです。

福音は、今日の状態がこのまま続くことはないという神の約束です。この約束は今日に至るまで有効です。一度も撤回されたことはありません。それは、世界のどこにしようと、神のすべての人々に有効なのです。

御国の福音

福音は、実に単純です。だれもが理解できるはずのものです。それでも、福音にはさまざまな次元と側面があります。最初に気づく以上のものを含んでいるのです。ダイヤモンドを思い浮かべてみてください。この世で最も大きなダイヤモンドです。カットが施されています。それは光を一つの面だけでなく、カットされたすべての面で屈折させます。福音は多彩に、すばらしい輝きを放っています。それは、神のかたちであるキリストの栄光です。³³

この知らせはどのようにして私たちに届いたのか

この知らせは、一人の人格としてやって来ました。そうです、この知らせは一人の人格なのです。それは律法ではありません。信仰告白でもありません。教理問答でもありません。それは一人の人間なのです。問題は、「何が」私たちを救えるかではありません。「だれが」私たちを救えるか、なのです。

この方は、私たちの一人となられました。それでいて、まったく別の方でした。神であると同時に人である方です。けれども、ご自分が神であることを後回しにして、低い姿で、いや弱さのうちに、私たちのところに來られた方です。

神は、私たちのところまで降りて來られます。神はご自分をまったく小さくされました。³⁴ 私たちが思い描くこともできない、無限なる方。私たちのよ

32. 創世記50章20節

33. コリント人への手紙第二4章4節

34. ペリピンへの手紙2章6～8節

うに始まりを持たない方。その方が人となられたのです。私たちのすぐ近くに来られました。³⁵ かつてないほど近くに。私たちと同じ目の高さまで降りて来られたのです。創造主が、ご自分の被造物のもとに。人の姿をとって。³⁶ この方は見られ、聞かれ、触れられ、抱きしめられました。³⁷ この方は見、語り、心を動かされ、泣き、人々を愛し、あわれみをもって人々に触れられました。

それは、私たちがついに理解するためです。この方は、支配者の華やかさをもって来られたのではありません。ナザレから一人の建築職人が来たのです。ガリラヤの下層の出身です。神はイエスにおいて私たちのもとに来られます。神は、約束されたことを実現されるのです。イザヤはこう預言しています。

主の霊が私を捕らえた。主が私に油を注ぎ、それによって、貧しい人々に良い知らせを伝える権威を与えられたからだ。主は私を遣わされた。絶望している人々に新たな勇気を与え、捕らわれている人々に告げるために。「あなたがたは自由だ！ あなたがたの鎖は解かれる！」と。³⁸

イエスは、ナザレの会堂で、この言葉をご自分に当てはめられました。この預言のことばは、今日、あなたがたの目の前で実現しました。³⁹ イエスの全生涯、そのことばと行いは、この預言のことばの成就であり、この良い知らせの完全な表現なのです。

イエスは神のかたちです。⁴⁰ イエスを見た人は、天の父を見たのです。⁴¹ イエスは神のミッションそのものです。イエスこそ、神が私たちに語りたいことなのです。⁴² 神がどなたであり、どのような方であるかを理解したいな

35. ヨハネの福音書1章14節

36. ビリビ人への手紙2章5～11節

37. ヨハネの手紙第一1章1～3節

38. イザヤ書61章1～2節

39. ルカの福音書4章16～22節

40. コロサイ人への手紙1章15節、ヘブル人への手紙1章1～3節

41. ヨハネの福音書14章9節

42. ヘブル人への手紙1章2節

ら、イエスから神を理解しなければなりません。イエスこそ、私たちにとっての神の姿です。福音書の記録に描かれているとおりです。神はそのような方なのです。

だからこそ、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネによる四つのイエスの生涯の記録は、福音書と呼ばれます。マルコはこう書き始めています。この書には、神の子イエス・キリストについての良い知らせがどのようにして始まったかが記されている。⁴³

イエスと共に、良い知らせが始まります。イエスについてこう書かれています。イエスはガリラヤに戻り、神から託されたことを告げ知らせた。「時が来た。今こそ神はご自分の支配を打ち立て、そのみわざを完成される。悔い改めて、この良い知らせを信じなさい！」⁴⁴

神の王としての支配とは何か

神の支配とは、愛と義による神の統治のことです。私たちの世界にとって、未来につながる唯一の選択肢です。世界の唯一の未来なのです。

多くのユダヤ人は、これを、ローマの占領者が打ち負かされ、その圧政が終わることだと理解していました。ところが、イエスにおいて来られたの是一名の素朴な人であって、政治的な権力を持つ王ではありませんでした。戦争の英雄でもありませんでした。イエスの国、神の王国は、期待されていたようにエルサレムのダビデの王座から始まるのではなく、十字架で生涯を終える一人の巡回説教者から始まります。それは、自分の罪を告白し、生き方を変える人々の心の中で始まるのです。イエスの国はこの世のものではありません。⁴⁵ それは神から来ます。それは異なっています。暴力も、抑圧も、軍事的な征服もありません。イスラエルで始まりますが、視野にあるのは全世界です。すべての人のために計画されたものなのです。

43. マルコの福音書1章1節

44. マルコの福音書1章14～15節

45. ヨハネの福音書18章36節

イエスにおいて、神の王としての支配は、既存の政治体制に向けられているわけではありません。別の目的があるのです。イエスは国中を巡り歩き、悔い改めと神への立ち返りを説かれます。神の支配は、イエスが現れたことによって、そしてイエスに従う人々の中で現実となります。イエスは数えきれないほど多くの病人を癒やされます。悪霊を追いつき出されます。神の王としての支配は、人々を苦しめる悪しき目に見えない力に向けられているのです。王や兵士のような目に見える権威だけが存在するわけではありません。人々を苦しめる目に見えない力も存在します。一番初めの、樂園の園にいた誘惑者のことを思い出してください。これについては後で詳しく述べます。

イエスは、悪がどこから来て、なぜ存在するのかという問いには答えておられません。イエスは行動されます。父の委任と権威によって、悪との戦いを始められるのです。神の王としての支配がこの世界に突入し、当時のローマ人よりもはるかに深いところで神の支配に逆らっているものを変えていきます。神の王国は、人々が最も苦しんでいるところで人々に出会います。最大の敵は、悪、不正、偽善、愛のなさです。一言で言えば、罪です。罪は人間を霊的に病ませました。罪は人間を支配する力を得たのです。当時も今も。

神ご自身が、罪と痛みと不安、苦しみと死の舞台に来られます。それらすべてをご自分に負い、それによって新しい王国を打ち立てるために来られるのです。

神の支配——すべての人にとって最善のもの

30年間、人目につかずに過ごされた後、イエスは3年半にわたって公に活動されます。イエスは癒やし、解放し、本当に大切なことを教えられます。偽善を暴き、飢えた人々を満たされます。こうしてイエスは、神がごなたであり、何を望んでおられるのかを示されます。それによって、神の永遠の王国がいつかどのようなものになるのかが、私たち人間に見えるようになるのです。イエスの働きは、ほんの始まりにすぎません。そして一つの約束です。神の基本計画には、イエスのうちにすでに輝き始めている大いなる目標が含まれているのです。それは新しい天と新しい地です。そこには、イエスが戦

われたものは何一つ残っていません。神がご自分の家族と共に住まわれる、新しい地です。⁴⁶ 暴君や独裁者によってではなく、変えられ、新しくされた人々によって心を込めて治められる、新しい地です。良い知らせとはこうです。皇帝や大統領を擁する世の国々は過ぎ去ります。神の国が来て、永遠に続くのです。⁴⁷

神の国はイエスと共に始まりました。それは今日、すでにここに 있습니다。外から見れば隠されています。目に見える王はいません。王は、旅に出て国を離れる主人のたとえのように、しばらくの間、去って行かれたのです。王の国は、王の帰りを待っています。⁴⁸ 今日、それは「潜伏中（アンダーカバー）」の王国です。国境もありません。首都もありません。それは、世界の帝国や政治体制と並んで生きています。不在で目に見えないけれども真の王であるイエスに、人々が忠誠を誓ったところなら、どこにでもあるのです。人々は、一切の暴力を用いずにこの国を築いていきます。⁴⁹ 彼らの武器は愛です。彼らは、よみがえって天に戻られたイエスが再び来られるのを待っています。イエスがそう約束されたからです。⁵⁰ 王の帰還は、公に、目に見える形で、力強く起こります。そのとき、世界のすべての帝国は終わりを迎えます。悪意をもって世界の出来事に影響を及ぼしている、目に見えない力も終わるのです。

良い知らせは、神の愛と義の支配に逆らうすべてのものに対する神の勝利を告げ知らせます。それはイエスの生涯において始まりました。神の最終的な勝利は、まだこれからです。それは止めようもなく近づいています。神の王国はすでにここにあります。まだ完全ではありません。まだ目に見えません。イエスが再び来られるまで、それは暫定的で神秘的な形で存在します。けれども、そこにはすでに今、来たるべきものの前味わいがあります。聖霊による平和と喜びです。⁵¹ 全地への福音の広がり、毎日感謝をもって王に

46. ヨハネの黙示録21章3～5節

47. ダニエル書2章44～45節、7章26～27節

48. マタイの福音書25章14～30節

49. マタイの福音書5章43～48節

50. 使徒の働き1章10～11節

51. ローマ人への手紙14章17節

服する人々が、この国の目に見えない存在を証ししています。今日に至るまでのしるし、奇跡、癒やしも同じように証ししているのです。

福音とは、ナザレのイエスがキリストであり、すべてのものの主とされたことの宣言です。⁵² 御子は父によって遣わされました。旧約聖書で読むことのできる古い預言を、すべて成就されました。ダビデの子孫として人となりました。私たちのため、私たちの罪のために死なれました。葬られ、よみがえらされ、神の御座で冠を授けられました。そこから治めておられます。この方にすべての力が与えられています。イエスこそキリストです！

神の御子の福音

イエス・キリストこそ福音です。新約聖書はそれをキリストの福音と呼んでいます。⁵³ 使徒たちは、これを宣べ伝えました。イエスの弟子となり、イエスに従う者となったすべての人々も、これを宣べ伝えました。⁵⁴ 彼らはイエスご自身を宣べ伝えたのです。⁵⁵ これが御国の福音です。イエスは王です。しかし、それ以上の方です。私たちに必要なのは、王だけではありません。贖い主も必要なのです。

四つの生涯の記録が福音書と呼ばれるのは、それが良い知らせだからです。福音書を読むと、イエスをご自分の宣伝のために何一つ努力しておられないことに気づきます。イエスは王にされることさえ望まれませんでした。⁵⁶ 癒やされた人々には、だれにも話さないように言われます。それでも彼らは話してしまいます。喜びがあまりにも大きいからです。⁵⁷ 悪霊につかれた人々、正確に言えば、その人々の中にいてイエスの本当の正体を知っていた汚れた霊たちには、話すことを禁じられます。

52. 使徒の働き2章36節、3章20～23節、10章36節

53. ローマ人への手紙15章19節、コリント人への手紙第一9章12節、コリント人への手紙第二2章12節、ピリピ人への手紙1章27節、テサロニケ人への手紙第一3章2節

54. 使徒の働き8章4、12、25、35、40節、10章36節、11章20節、13章38節、14章7、15、21節

55. 使徒の働き5章42節、エペソ人への手紙3章8節、ピリピ人への手紙1章17～18節、コロサイ人への手紙1章28節

56. ヨハネの福音書6章15節

57. マルコの福音書1章34、43～45節、5章43節、8章26節

よく考えてみると、イエスがどなたなのかを本当に理解した人はいませんでした。最も身近な人々でさえそうでした。ペテロが「あなたはキリストです」と言ったときでさえ、⁵⁸ 死んでよみがえったキリストだけが、預言されていたことを成就するのだということを、ペテロは知らなかったのです。

弟子たちと共に経過しておよそ2年たったころ、イエスは、ご自分が殺されることについて語り始められ、弟子たちを驚かせます。しかもそれは、大王の都エルサレムでのことだと言われるのです。⁵⁹ パリサイ人、祭司長たち、律法学者たちの憎しみがきっかけとなって。同時にイエスは、ご自分が三日後によみがえることも語られます。⁶⁰

すべては想像を絶する悲劇で終わるのでしょうか。それが良い知らせでありうるのでしょうか。殺される王が？

しかしイエスは、ご自分が多くの人のために自分のいのちを贖いの代価⁶¹として与えるのだと言われます。ご自分のいのちを、買い戻すための代価として差し出すのです。多くの人を贖うためです。奴隷の状態から買い戻すためです。罪と死の牢獄から。我欲と自己愛から、さまざまな依存から。目に見えない力の支配から。この死は、包括的で、世界を変える救いの出来事となるはずのものでした。事故でも敗北でもありません。

イエスの生涯は、それを成就することに向けられていました。⁶² これほど矛盾して聞こえることを、です。⁶³ イエスはそれを前もって知っておられました。⁶⁴ 人々の贖いのために代価を払う覚悟がおりでした。ご自分のいのちをもって。イエスは、人々のために死ぬことができるように人となられたのです。⁶⁵ ただ良いことだけを行い、良いことだけを語られた方。何の罪もな

58. マタイの福音書16章13～20節、ルカの福音書9章18～21節

59. 詩篇48篇2節、マタイの福音書5章35節、21章5節

60. マタイの福音書16章13～21節、マルコの福音書8章27～32節、ルカの福音書9章18～22、44～45節、18章31～34節

61. 詩篇49篇7節、マタイの福音書20章28節、マルコの福音書10章45節、テモテへの手紙第一2章6節

62. ルカの福音書9章51節

63. ルカの福音書12章50節、ヨハネの福音書17章4節、19章28～30節

64. ヨハネの福音書18章4節

65. ヘブル人への手紙2章14節

かった方。⁶⁶ 私たちすべてとはまったく違う方です。献身と隣人への奉仕に満ちた生涯でした。ひとかけらの利己心もありませんでした。決して終わってはならなかったほど、尊く、清く、聖なる生涯でした。福音とは、イエスの生涯と行いのことです。イエスの道徳的な完全さだけではありません。罪、病、悪霊につかれること、そして死に対するイエスの抵抗、戦い、勝利でもあるのです。

その生涯は、死において頂点に達し、成就し、究極の勝利を収めるはずのものでした。すべてを変えた死。宇宙における力関係の転換です。

イエスの愛は、人を納得させます。イエスが人々に出会い、人々を追い求め、立ち上がらせ、癒やし、大切にされたその姿に表れています。分け隔てなく、小さな者にも大きな者にも、病人にも罪人にも。このイエスが宣べ伝えられるのです。死んで、よみがえり、生きておられる方です。今日、福音のうちに、目には見えなくても、力強く感じ取れるほどに臨在しておられる方です。人々に出会われる方です。

福音に出会う人は、イエスに出会います。イエスは今日も生きておられます。かつてイスラエルを巡り歩いておられたときと同じように、現実生きておられるのです。今は、よみがえられた方として、神の天の栄光のうちに生きておられます。神の御座に着いておられます。けれども、御霊によって、良い知らせが宣べ伝えられるところならどこにでも臨在しておられます。その証拠に、毎日、人々が信仰の従順のうちにイエスに立ち返り、イエスに従っているのです。

父は、私たちの罪のための償い（宥め）として、つまり私たちの罪の赦しとして、御子を遣わされました。それは、父が世を愛しておられることの証拠です。父と子と聖霊は、世界を救うことにおいて一つとなっておられます。

67

66. コリント人への手紙第二5章21節、ペテロの手紙第一2章22節、ヘブル人への手紙4章15節、ヨハネの手紙第一3章3、5節

67. ヨハネの福音書3章16節、ヨハネの手紙第一4章9～14節

王と十字架

イエスは、ご自分の最期に焦点を合わせておられました。早すぎる最期です。⁶⁸しかし同時に、何か新しいことの始まりでもありました。はるかに大きなことの始まりです。イエスは、ご自分のいのちを贖いの代価として与えるために来られたのです。多くの人の贖いのために！それが、イエスの父の心からの願いであり、みこころでした。⁶⁹そしてイエスは、このみこころを成し遂げるために、すべてを懸けられました。イエスの生涯の最後の幕に近づいてみましょう。それはあまりにも説明しがたいことなので、私たちは慎重に、また控えめに近づきます。

王殺し

イエスは弟子たちと共に、過越の祭りのためにエルサレムへと旅をされます。都の手前の道で、そして都に入っていくとき、イエスは王のように、いや王として迎えられます。ついに王としての支配が始まるのでしょうか。

都は人であふれています。数えきれないほどの巡礼者が行き交っています。イエスは丸一週間、そこに滞在されます。⁷⁰私たちは今日、それを受難週と呼んでいます。イエスは教え、律法学者たちと絶えず論争されます。彼らはイエスを追い詰め、罠にかけようとしますが、そのたびにイエスの知恵によって論破されます。イエスは、宗教指導者たちの偽善と愛のなさを暴かれます。人々への影響は大きなものでした。神殿の庭で両替人の台を、短い間ではありましたが実力でひっくり返された宮清めの出来事は、民の指導者たちにとって我慢の限界を超えるものでした。彼らは、この目障りなナザレ人を抹殺する計画を練ります。

木曜日の夜、イエスは弟子たちと共にユダヤの過越の食事をされます。この過越の食事の間に、イエスは新しいことを始められます。パンを取って裂き、こう言って弟子たちに分け与えられるのです。これは、**あなたがたのた**

68. 詩篇102篇24節

69. ルカの福音書22章42節

70. マタイの福音書21～27章

めに与えられる、わたしのからだです。それから、ぶどう酒の杯を取って言われます。これは、罪の赦しのために流される、新しい契約のわたしの血です。⁷¹ このとき弟子たちは、これらのことばがどれほど広く深い意味を持っているのかを理解していませんでした。

それから、すべてが動き出します。イエスは、自分の弟子の一人に裏切られます。⁷² 捕らえられます。⁷³ 大祭司たちの前に引き出されます。⁷⁴ ローマの総督ピラトに引き渡され、罪がないのに有罪とされます。⁷⁵ 拷問を受けます。すべてが制御不能に陥ったかのように見えます。イエスは、さまざまな力のもてあそびものとなります。イエスは意味深いことを語っておられました。今はあなたがたの時、闇の力です。⁷⁶ 十字架の出来事において働いていたのは、よく知られた宗教的・政治的指導者たちだけではありませんでした。目に見えない力も働いていたのです。すべてが一つになって、神の御子と神の王国に敵対しました。

人間を踏みにじるこの見世物は、十字架刑で幕を閉じました。最も残忍な処刑方法の一つによって、イエスは処刑されたのです。あの忘れることのできない金曜日に。⁷⁷ イエスは、左右に一人ずつ、二人の犯罪人と共に十字架につけられます。太陽が最も高くなる昼の12時から午後3時まで、闇が全地を覆います。⁷⁸ 十字架につけられたイエスは叫ばれます。わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。⁷⁹ そこで、何か尋常ではないことが起きているのです。最後にイエスは、これまでに聞かれた中で最も重要なことばを叫ばれます。完了した！⁸⁰ ギリシア語の *tetelestai* という言葉——イエスはおそらくアラム語で叫ばれたのでしょう——は、「任務は果たされた」という意味です。イエスが来られた目的はすべて成し遂げられまし

71. マタイの福音書26章26～30節、マルコの福音書14章22～26節、ルカの福音書22章14～20節

72. マタイの福音書26章14節、マルコの福音書14章10節

73. ヨハネの福音書18章1～11節

74. ヨハネの福音書18章12～24節

75. ヨハネの福音書18章28節～19章16節

76. ルカの福音書22章53節

77. ヨハネの福音書19章17～24節

78. ルカの福音書23章44節

79. マタイの福音書27章46節

80. ヨハネの福音書19章30節

た。贖いの代価は支払われたのです。このことばの直後に、イエスは息を引き取られました。ご自分の霊を父の御手にゆだねられたのです。⁸¹

十字架刑を執行し、すべてを間近で見ていたローマの百人隊長は、深く心を揺さぶられます。彼は言います。**この方は本当に神の子であった！**⁸²

多くの人が長い間望んでいたことが、ついに片づけられました。人々は、自分の心の中にあるものをさらけ出しました。これ以上ひどく、醜く、残忍なことはありませんでした。暴力と憎しみと闇の力が勝ち誇ったのです。

イエスには、何一つ罪を着せることができませんでした。罪のない方が、犯罪人として死なれるのです。あらゆる苦しみの中で、イエスは抵抗されませんでした。⁸³ **父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。**⁸⁴ というイエスの願いは、比類のないものです。父は、苦難の道をイエスと共に歩まれます。けれども、それによってイエスが死から救われることはありません。父は、ご自分の御子を惜しまれなかったのです。⁸⁵

イエスは、共に十字架につけられた者たちよりも早く、間もなく息を引き取られます。ユダヤの議会の議員であったアリマタヤのヨセフが、その遺体を、まだ使われていない自分の墓に納めます。⁸⁶ イエスに望みをかけていたすべての人にとって、世界が崩れ落ちます。「希望は最後に死ぬ」と言われます。今、その希望が死んでしまったのです。

日曜日の朝、イエスの遺体に香油を塗るために墓にやって来たのは、女性たちでした。彼女たちは途方に暮れます。何トンもある墓石が墓のわきに転がっているのです。開いた墓の中に、イエスのからだは見当たりません。墓は空です。イエスの遺体は、もうそこにはありません。代わりに御使いたちがいて、こう言います。

81. ルカの福音書23章46節、ヨハネの福音書19章30節

82. マルコの福音書15章39節

83. イザヤ書53章7節、ペテロの手紙第一2章23節

84. ルカの福音書23章34節

85. ヨハネの福音書3章16節、ローマ人への手紙8章32節

86. イザヤ書53章9節、ルカの福音書23章50～56節

あの方はここにはおられません。言っておられたとおり、よみがえられたのです！⁸⁷

予想とは違って

弟子たちは、自分たちの師がよみがえられたことを、ゆっくりとしか理解できません。やがてイエスが彼らにご自身を現し、彼らはイエスを見て、触れます。それはイエスでした。同じ方でありながら、どこか違っています。よみがえられたのです。新しいからだです。それでも、手と足の釘の跡、わき腹の傷ははっきりと見えます。イエスは彼らと共に食事をされますが、閉じられた戸を通り抜けて入って来られます。あるときはここに、あるときはあそこに現れます。⁸⁸ 多くの弟子たちにご自身を現されます。ご自分の兄弟ヤコブにもです。⁸⁹ よみがえらされた方として新しい存在の在り方のうちにあるイエスは、別の方でありながら、同時にまさに彼らのイエスなのです。

弟子たちは、イエスが前もってすべてを語っておられたことを理解し始めます。40日の間、彼らはよみがえられたイエスと共に過ごします。イエスは多くの問いに答えられます。彼らの疑いを取り除かれます。新しい任務に向けて、彼らを新たに方向づけられます。御国について彼らに教えられます。⁹⁰ ご自分の死について。なぜご自分が死ななければならなかったのかについて。イエスはそれをすでに語っておられましたが、今やそれがますます明らかになっていきました。それは無意味な悲劇ではありませんでした。それは神の基本計画であり、その中心にイエスの死とよみがえりがあるのです。世界を揺るがした霊的な大地震の震源地です。新しい時代の要です。宇宙における前線の移動、力関係の転換なのです。

あなたは、なぜ十字架がこのような宇宙的な意味を持つというのか、と疑問に思われるでしょう。十字架は、むしろそれとは正反対のものを表している

87. ルカの福音書24章1～12節、ヨハネの福音書20章1～10節

88. ルカの福音書24章13～49節、ヨハネの福音書20章11～31節、21章1～14節

89. コリント人への手紙第一15章5～7節

90. 使徒の働き1章3節

ではないか、と。十字架刑は、人間から人間らしさを奪い、極限まで辱め、記憶から消し去るためのものでした。

神の視点から見た十字架

私たちは十字架を遠くに見ています。はるか昔に起こった出来事です。多くの点で私たち自身の世界や文化とは異質に思える、そういう世界と文化の中の出来事です。しかし、この十字架を正しく理解するなら、私たちはこの遠い十字架の中に、神が私たちの近くにおられることを発見するのです。

弟子たちは、メシアの死が事故ではなかったことを理解し始めました。それは私たちの贖いのための代価だったのです。彼らは、まさにそうなるはずだったのだと悟り、それを宣べ伝えました。⁹¹ それは必要なことでした。キリストは私たちのために死なれたからです。⁹² 彼らは、理解できない出来事に、後から意味をこじつけようとしたのではありません。自分自身や他の人々を安心させるためにそうしたのではないのです。彼らは、イエスが死の前と後に語られたことを通して理解していたのです。神はイエスをよみがえらせ、高く上げられました。今や世界の未来はこの方にかかっています。十字架の出来事において、イエスの自己犠牲において、彼らは世と和解する神のわざを認めたのです。⁹³ イエスがいけにえとして世の罪を負い、取り除かれたことを認めたのです。⁹⁴

イエスが無抵抗にご自身をささげられたことによって、神の愛がどれほど大きいかが明らかになりました。十字架の上で、形が損なわれ、責めさいなまれたイエスのうちに、和解のための神の御手が差し伸べられているのです。

91. 使徒の働き2章22～24節、3章18、24節、8章35節、9章22節、13章32、38節、18章28節、26章23節

92. コリント人への手紙第一15章3節、ガラテヤ人への手紙1章4節、3章13節、テサロニケ人への手紙第一5章10節、テトスへの手紙2章14節、ペテロの手紙第一2章24節、ヨハネの手紙第一3章16節、ヨハネの黙示録1章5節

93. コリント人への手紙第二5章19～21節

94. ヨハネの福音書1章29、36節

私たちのためにささげられた

イスラエルには、動物のいけにえをささげる祭儀がありました。ほかの多くの民族にもありました。その一部は今日まで存在しています。新約聖書は、イエスの死を一つのいけにえとして描いています。いわば、イスラエルがささげてきたすべての動物のいけにえの成就としてです。⁹⁵ これはメタファーであり、イエスが成し遂げられたことを私たちが理解するための助けです。いけにえという考え方は、祭儀の外でも知られていないわけではありません。ある人が、他の人々を救うために自分自身をささげるような場合です。

動物のいけにえは、祭壇で静かにほふられました。けれども、イエスを殺したのは人間たちでした。イエスは、あっさりと、あるいは素早く死なれたものではありません。暴力によって殺されたのです。いけにえの本質には、血を流すことと死が含まれていますが、苦しみや残虐さは含まれていません。イエスの死は、意図的に暴力的な、邪悪な出来事でした。十字架刑は見せしめのためのものだったのです。人々がそれに気づいていたかどうかにかかわらず、イエスに対する彼らの暴力は、神に対する暴力でした。

世界の暴力に対する神ご自身の応答は、悪の力を無力にすることでした。それに耐え、それを吸収することによってです。だからこそ、イエスが攻撃されたときにご自分を弁護されなかったことが、これほど大きな意味を持つのです。赦しには、内なる痛みを耐え、それを吸収することが含まれます。そして、恨み、憤り、憎しみ、復讐心が生まれることを拒むことが含まれます。神は、罪のない犠牲者としてこの世に来られます。結局のところ、いけにえの死は唯一無二のものでなければなりません。単なる儀式としての動物のいけにえではなく。結局のところ、旧約聖書のいけにえは、実際、真のいけにえのひな形にすぎなかったのです。

イエスは私たちの罪のゆえに死なれました。しかし何よりも、私たちの罪のために死なれたのです。⁹⁶ イエスは、世の罪を取り除く神のいけにえの子羊

95. エペソ人への手紙5章2節、ヘブル人への手紙7章27節、9章14、26節、10章12、14節

96. コリント人への手紙第一15章3節

でした。⁹⁷ いけにえとして、イエスこそ、私たちが自分の罪から、自分の汚れからきよめられるための唯一の手段なのです。聖なる神の御前に出るためです。

いけにえに手を置く、あるいは手を押し当てることによって、ささげる人は自分をいけにえと一体化させます。何かがいけにえへと移るのです。汚れ、不浄がいけにえに移され、そうして滅ぼされました。いけにえは、ある種の身代わりとなります。いけにえ、より正確にはいけにえの血は、罪を償うことができました。償いとは、私たちの罪が消し去られることを意味します。そして、罪が引き起こしたことも取り消されます。罪は覆われ、その力は打ち碎かれます。壊れていたものが、元どおりにされるのです。

イエスは、すべての動物のいけにえのひな形を成就されました。そして同時に、それを終わらせられたのです。⁹⁸ 不要なものとされたのです。今や、罪のない一人の人間が、私たちの罪のために死なれました。完全な方が、罪人のために。私たちの罪、背き、咎、神と人に対する数えきれない過ち、私たちの不従順——それを、イエスはご自分に負われたのです。まるでご自分がそれを行ったかのように。そして、それを永遠に取り除かれました。⁹⁹ ご自分の死の中へと。十字架の上で、イエスは私たちの罪と罪過の重荷を負われました。そこ、十字架の上で、神は御子という人格において罪を断罪し、いや裁かれたのです。¹⁰⁰ ですから、イエスの死は、ほかの十字架につけられた人々の死とは違っていました。ここでは、罪人ではない方が罪人の死を死なれたのです。私たちの罪と不義を負わされたいけにえとして。全世界の罪と一つにされることは、耐えがたい出来事です。他の人々のために、罪に対する断罪を自らの内に負うことは、この世のどんな痛みや経験とも比べることができません。¹⁰¹ それは一度限りの出来事です。トラウマとなるような十字架刑という、最も人間に敵対的な状況の中での出来事です。それが代価でし

97. ヨハネの福音書1章29、36節、ペテロの手紙第一1章18～21節

98. ヘブル人への手紙7章27節、9章26、28節、10章10、14節

99. ヘブル人への手紙8章12節、10章17節、ミカ書7章19節

100. ローマ人への手紙8章3節

101. ローマ人への手紙8章3節、コリント人への手紙第二5章21節

た。ほかの二本の十字架の間に立つこの十字架の上で、史上最大の苦しみが起こったのです。

この苦しみこそ、未来が人の子の手の中にあることの保証です。神ご自身が負われた苦みの深さは、奥義であり続けます。神ご自身が、唯一可能な解決をもたらされます。それは、御子の唯一無二のいけにえです。このいけにえは、私たちが決して取り消すことも成し遂げることもできなかったことを成就するのです。

私たちのために、また神に対して、イエスがいけにえとしてご自身をささげられたこと。それは、私たちに対する限りない愛、寛大さ、好意の証拠であり、土台であり、出発点なのです。

死んだキリスト、死んだままのキリストは、私たちを助けることができません。¹⁰² すべてを決定する問いが残っていました。神は、御子のいけにえを本当に受け入れられたのだろうか。

そうです！ 神はイエスをよみがえらせられました。イエスのよみがえりは、奇跡以上のものです。感嘆符以上のものです。それは、神がこの唯一無二のいけにえを喜んで受け入れ、今や罪人を義と宣言することがおできになることを宣言しているのです。¹⁰³ それは、神が無条件に恵みを示し、赦してくださいることを意味します。そして、罪人を義人としてくださることを意味します。¹⁰⁴ まるで一度も罪を犯したことがなかったかのように。

神はいけにえを必要とするのか

キリストの十字架については、果てしなく思いめぐらすことができます。あなたも、こう考えたことはないでしょうか。神はいけにえを必要とされるのだろうか。あるいは、愛の神が、ご自分の怒りを鎮めるためにいけにえを要求されるなどということが、どうしてありうるのだろうか。

102. コリント人への手紙第一15章17節

103. ローマ人への手紙4章24～25節、コリント人への手紙第一15章3節

104. ローマ人への手紙3章21～26節、5章1、9節

まず初めに、はっきりさせておくべきことがあります。いけにえを必要としていたのは私たちだったということです。神ではありません。問題を抱えていたのは私たちでした。神ではありません。私たちは罪を犯したので、償いのため、埋め合わせのために、いけにえをささげなければならないはずでした。償いとは、違反を犯した者が責任を負うべきものだからです。しかし、この状況を正すことのできる唯一の方は、神ご自身です。神が代価を支払われます。神との関係を回復するためです。進んで、喜んで赦そうとされることによってです。それが、神がイエスにおいてなさることなのです。

私自身も、血を流すいけにえなしでは済まないのだろうか、と考えたことがあります。何よりも、イエスの恐ろしい十字架の死なしでは、と。十字架につけられる直前、ゲツセマネの園で、イエスは祈り、懇願されます。恐れおののき、うろたえながら。イエスは、何でもおできになるはずの父に、十字架を免れることができないかと願われます。苦しみの杯が自分から過ぎ去るようにと。しかしイエスは、父のみこころを成し遂げられます。抵抗することなく、不当な有罪判決と十字架の出来事へと進んで行かれるのです。¹⁰⁵

園での祈りのことばが、私たちの問いに答えています。イエスの十字架と死なしに、神の救いのみこころを成し遂げることはできなかったのです。確かに、神には何でもおできになります——しかし神には、救いへと至る神ご自身の道があるのです。それは神の宇宙であり、神の世界です。生命のルールと枠組みを定めるのは神です。私たちには身代わりが必要でした。死者の中からよみがえり、私たちをいのちへと共に引き上げてくださる解放者が必要でした。ご自分の死によって死の力に打ち勝つ解放者が必要でした。死という敵の砦に攻め入り、鎖と門を打ち砕く方が。

神の愛とイエスの愛は、苦しみよりも強いのです。イエスは、何をあれほどまでに恐れておられたのでしょうか。ローマ人によって十字架で処刑されることでしょうか。確かにそうでしょう。しかしそれだけでなく、私たちの罪と一体とされることでもありました。私たちの罪を負うこと。まるでご自分がその張本人であり、加害者であるかのように。そこにこそ、私たちには想

105. マタイの福音書26章36～46節、マルコの福音書14章32節、ルカの福音書22章39節

像もできない、最も大きなことがあります。あの日ゴルゴタにいただれ一人として理解しなかった、いや薄々感づくことさえなかったことです。十字架の上で、神の限りない愛と聖さ、世の数えきれない罪、人間の憎しみ、そして闇の力がぶつかり合います。イエスは、それに耐えなければなりません。それを負い、耐え忍ばなければなりません。そして、それをご自分の死の中へと共に持って行かなければならないのです。

もし十字架なしに神の救いのみこころが実現可能であったなら、ゴルゴタでのあの最期はなかったでしょう！ 歴史の転換点としての十字架は、一つの逆説であり続けます。しかし、それは私たちにとって、神の力、神の知恵であることが明らかになるのです。もう一度言います。それが神の道なのです。

それは人間が考え出したものではありません。イエス・キリストの十字架は、壊れた世界に対する神の答えです。キリスト者、イエスに従う者たちは、十字架について言い訳をする必要はありません。十字架は、つまりき（スキャンダル）であり続けます。信じない人々にとって、十字架を受け入れやすい形や論理に当てはめることはできないのです。

神は、なだめられるため、あるいはご自分の怒りを静めるために、いけにえを必要とされるのか——この問いには、次のように答えることができます。私たちはみな、神の怒りの下にあります。¹⁰⁶ 神の怒りは明らかにされており、¹⁰⁷ それは将来の裁きにおいて現れます。¹⁰⁸

しかし、神は怒るのに遅い方です。¹⁰⁹ 神はご自分の怒りを抑えておられます。悪をご自分の身に引き受け、罰を下すことを控えておられます。赦しとは、負うこと、耐え忍ぶことと関係があります。神ご自身、ご自分の民イスラエルの不義を幾度も耐え忍ばれました。ゴルゴタはその頂点です。そこで神は、ご自分の民の罪を耐え忍び、もし私たち人間が全能であったなら下し

106. ヨハネの福音書3章36節、ローマ人への手紙3章5節、エペソ人への手紙2章3節

107. ローマ人への手紙1章18節

108. ローマ人への手紙2章5、8節、5章9節、コロサイ人への手紙3章6節、テサロニケ人への手紙第一1章10節

109. 出エジプト記34章6節、民数記14章18節

ていたであろう応答を差し控えられます。神は沈黙されます。神は、ゲツセマネでの祈りではなく、十字架の上でのイエスの祈りを聞き届けられるのです。父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっているのです。¹¹⁰

十字架の上で、神はご自分の怒りを終わらせられます。神は怒りを抑えられるのです！ 十字架は、神の怒りが終わりを迎える場所です。神の正当な怒りが燃え上がる場所ではなく、それが消える場所なのです。その証拠は、無抵抗にご自身をささげられたことです。十字架につけられた神として。

それはつまりです。しかし私たちにとっては、怒りと暴力が消え去る炉心溶融（メルtdown）なのです。罪と死の力が血を流し尽くすことなのです。

1986年にチェルノブイリで原子炉が爆発したとき、さらに大きな大惨事が起こる恐れがありました。灼熱の原子炉の下には、水をたたえたプールがありました。溶けた炉心がそこに流れ込めば、巨大な水蒸気爆発が起こり、さらにははるかに多くの放射能が放出されていたでしょう。三人の男性が自ら名乗り出ました。彼らは、放射能に汚染され、水浸しになった地下室へと降りて行きました。そこで、水を排出できるように手でバルブを開けたのです。彼らは、生きて戻れるとは思っていませんでした。それでも彼らは行きました。ウクライナのため、ヨーロッパのために。彼らの働きによって、大惨事は回避されました。三人とも生き延びました。

そのように、イエスは想像もできない仕方で、私たちのために、大惨事を引き起こしたもの——罪——となられたのです。¹¹¹

善をもって悪に打ち勝つ

キリストにおいて、悪は終わりを迎えます。キリストが悪をご自分に負われるからです。人間の悪を耐え忍ばれるからです。弱さのうちに十字架につけ

110. ルカの福音書23章34節

111. コリント人への手紙第2章5節21節

られるからです。¹¹² しかし、神の弱さは人よりも強いのです。¹¹³ 神の愛は、悪によって消し去られることはありませんでした。キリストは善をもって悪に打ち勝たれました。敵を愛することによってです。その愛のほうが強く、勝利したのです！ 悪は荒れ狂うだけ荒れ狂い、それでも敗れました。よみがえられた方のうちに、和解のための神の御手は差し伸べられたままなのです。

神は、キリストにおいて、ご自分をささげる愛のうちに、私たちの暴力をご自分の身に引き受けられました。私たちを、墮落した罪深い本性から、権力と復讐と報復に支配された心から贖い出すためです。

十字架において、神は救いと和解をもたらす方として臨在しておられます。¹¹⁴ 十字架につけられた方のうちに。三位一体の神——父と子と聖霊——は、十字架によって永遠の救いを成し遂げられました。¹¹⁵ イエスの血によって、償いがなされました。その血は私たちの罪を覆います。¹¹⁶ 十字架の上で、力としての罪は死刑の判決を受けました。¹¹⁷ 私たちが新しいのちに生きることができるためです。私たちの罪が赦されるだけでなく、罪の力も打ち碎かれるためです。罪がもはや私たちの人生を支配することのないようにするためです。

これが十字架の良い知らせです。三位一体の神は、十字架の上で、必要なすべてのことをご自身のうちでなさるのです——私たちのために！

112. コリント人への手紙第二13章4節

113. コリント人への手紙第一1章25節

114. コリント人への手紙第二5章19節

115. ヘブル人への手紙9章14節

116. ヨハネの手紙第一2章2節

117. ローマ人への手紙8章3節



神の限らない知恵と力

神の偉大さは、神のへりくだりのうちに現れます。仕え、自らをささげる愛のうちに現れるのです。神がキリストにおいて十字架に向かわれるとき、神はご自分の本性に反して行動しておられるのではありません。神は、ご自分のあるがままに行動しておられるのです。ゴルゴタ以来、神の愛は一つの形を持っています。十字架という形です。善を求め、自らを引き渡す愛です。十字架が神の愛の最大の啓示であるならば、神はいつもそのような方であったのです。そして、これからもいつもそのような方であり続けるのです。

十字架の上で、神はご自分の知恵を示されます。それでいて、愚かに見えます。十字架の上で、神はご自分の力を示されます。それでいて、ご自分を無力にされます。十字架の上で、神はご自分の美しさを示されます。それでいて、ご自分の姿が損なわれるままにされます。十字架の上で、神はご自分の愛を示されます。神は、私たちの罪の結果とご自分を一つにされるのです。神からこれ以上遠く離れることはできないという場所。まさにそこまで、神は身をかがめて降りて来られるのです。

十字架は神の力です。¹¹⁸ これは驚くべきことです。パウロによれば、神がご自分の力を示されるとき、それはこのような姿をとります。イエスは、神であることの特権を脇に置かれます。¹¹⁹ 傷つきやすい一人の人間となられます。まさにご自分を十字架につける人々の罪責と恥を、ご自分に負われるのです。私たちは、力というものをこのようには考えません。多くのキリスト者も、このことを真剣に受け止めてきませんでした。

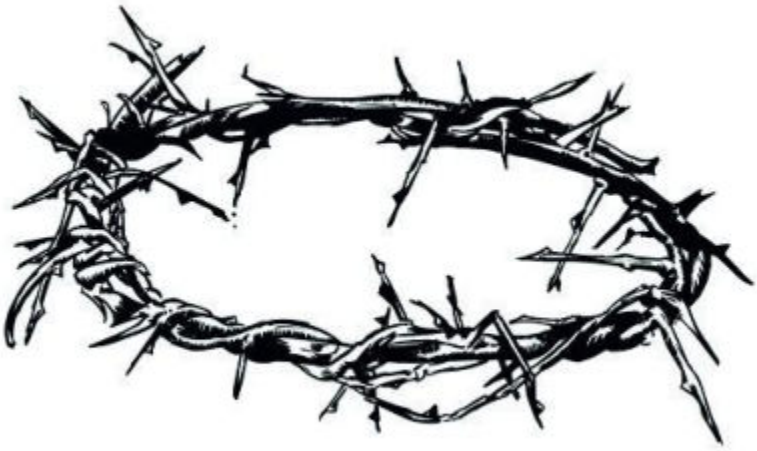
私たちは力というと、強制や暴力を思い浮かべます。人間は自分たちの神々をそのように思い描きます。十字架はその正反対を示しています。十字架における神の力とは、私たちの心を求める求愛なのです。まったく異なる神のご性質によって。自らをささげる愛によってです。

キリストは弱さのうちに十字架につけられました。しかし、神の弱さは人の強さよりも強いのです。¹²⁰ 力の法則によってではなく、愛の法則によってです！ 敵を愛する愛の法則によってです。

118. コリント人への手紙第一1章18節

119. ビリビ人への手紙2章6～8節

120. コリント人への手紙第一1章25節、コリント人への手紙第二13章4節



十字架が私たちに与えるもの

十字架は、私たち人間が何をしでかしているのかを示しています。神に対する反逆のうちに、意識的であれ無意識的であれ、私たちの人生の無秩序のうちに。¹²¹ 神の居場所のないところで。あるいは、神がわき役しか演じていないところで。しかし、神に敵対するかのように向き合う人々のためにさえ、神は心の底から、御子を死に渡すところまで進んでくださるのです。¹²² 敵意を和解と平和へと変えるためです。

私たちを死と罪から解放するために、ただ一人罪のない方が死なれ、再び生きる者となりました。神は、キリストがなさったことを私たちに当てはめてくださいます。キリストの死は私たちの死であり、キリストの復活は私た

121. ヨハネの手紙第一2章15～17節、3章4節

122. ローマ人への手紙5章6～10節

ちの復活なのです。私たちはキリストと共に死に、よみがえったのです！¹²³
キリストは十字架の上で私たちと一つになられました。私たちはキリストと結び合わされています。キリストの死は私たちの死です。私たちの古い、罪深い、挫折した人生の終わりです。そして、キリストの復活は私たちの復活です。霊的な死¹²⁴から、新しい永遠のいのちへとよみがえらされたのです。新しい始まりは、ただ十字架によって、キリストによってのみ可能なのです。

もし神が罪と悪をこの世から取り除こうとされたなら、人間をこの世から取り除かなければならなかったでしょう。罪は、切り分けて手術で取り除くことのできる、私たちの一部分ではないからです。私たちは、骨の髄まで罪人なのです。しかし、神は罪人の死を望まれません！¹²⁵ キリストの死のうちに、私たちの古い、神なき人生は死にました。キリストの死のうちに葬られたのです。私たちは新しいいのちへとよみがえらされたのです。

十字架、それは愚かなこと

十字架において、人々の考えは分かれます。ある人々にとって、十字架は愚かなことです。十字架の上で苦しみながら死ぬ世界の救い主など、神の王国も救いももたらすことはできない、と。世界のどの宗教も、創始者が屈辱のうちに生涯を終えたことを理由に、その創始者をたたえたりはしません。

しかし、信じる人々にとって、十字架は最も偉大なものです。神の力であり、神の知恵です。彼らにとって十字架は、救い、和解、赦し、自由を意味します。¹²⁶ 十字架についてのこの認識を人の内に生み出すことができるのは、神だけです。

つまずきとなる十字架がなければ、福音は良い知らせではありません。十字架があってこそ、福音は救いをもたらす神の力なのです。救い出すための力

123. ローマ人への手紙6章1～14節、エペソ人への手紙2章1～10節、コロサイ人への手紙2章11～14節、3章1～4節

124. ルカの福音書15章32節

125. エゼキエル書18章23、32節

126. コリント人への手紙第一1章18、23～24節

です。ただ十字架につけられた方だけが、私たちにとって神からの知恵、義、聖さ、贖いとなられたのです！¹²⁷ 一つの死、公開の処刑によって大いなる救いをもたらすこと、それが神の知恵なのです。

- 勝利と解放、力関係の転換¹²⁸
- 償い¹²⁹
- 和解¹³⁰
- 赦し¹³¹
- 永遠のいのち¹³²
- 贖いの代価¹³³
- 贖い¹³⁴
- 癒やし¹³⁵
- 最大の愛の証し¹³⁶
- 模範¹³⁷
- 一致¹³⁸

キリスト者にとっても、神の知恵が高すぎる場合があります。決定的なのは、彼らが十字架について何を理解し、何を信じているかではありません。はるかに大切なのは、十字架によって世界に救いを与えてくださる神に信頼

127. コリント人への手紙第一1章30節

128. 使徒の働き26章18節、コロサイ人への手紙1章12～13節、2章15節、ヘブル人への手紙2章14～15節

129. ローマ人への手紙3章24～26節、8章3、32～34節、ガラテヤ人への手紙3章13節、エペソ人への手紙5章2節、ヘブル人への手紙2章17節、ヨハネの手紙第一2章2節、4章10節

130. ローマ人への手紙5章10節、コリント人への手紙第二5章18～20節、コロサイ人への手紙1章20～22節

131. 使徒の働き2章38節、エペソ人への手紙1章7節、ヘブル人への手紙10章18節

132. ヨハネの福音書3章14～16節、6章51～56節

133. マタイの福音書20章28節、マルコの福音書10章45節、使徒の働き20章28節、コリント人への手紙第一6章20節、テモテへの手紙第一2章5～6節

134. エペソ人への手紙1章7節、5章25節、テトスへの手紙2章14節、ヘブル人への手紙9章12節、ペテロの手紙第一1章18～19節、ヨハネの黙示録1章5～6節、5章9節

135. イザヤ書53章5節、61章1節、ルカの福音書4章18～19、23節

136. ヨハネの福音書3章14～16節、10章11節、15章13節、ガラテヤ人への手紙2章20節、ヨハネの手紙第一3章16節、4章10節

137. エペソ人への手紙5章2節、ピリピ人への手紙2章5～11節、3章10～11節、ペテロの手紙第一2章21～24節、ヨハネの手紙第一3章16節

138. ヨハネの福音書11章52節、12章24節、エペソ人への手紙2章16節

することです。人を救うのは知識ではなく、そこで一人の方が私たちのためにすべてを償ってくださったと信じる信仰なのです。

あなたは、十字架において私たちに出会ってくださる神に信頼していますか。

家に帰る

十字架につけられたキリストに信頼する人は、救われます。その人にとって、すべてが変わります。その人は、放蕩息子、放蕩娘として、天の父の腕の中に迎え入れられます。神の息子、神の娘となるのです。¹³⁹ 十字架の向こうには、父の大いなる祝福の富が待っています。¹⁴⁰ 父は、御子と共にすべてのものを私たちに与えてくださいます。¹⁴¹ 十字架によって、イエスは私たちを神のもとへ連れ戻してくださいます。¹⁴² 父の心のもとへと。¹⁴³ 父との交わりの中へと。¹⁴⁴

イエスは自ら進んで私たちの場所に立たれました。あらゆる結果を引き受けて。罪の報酬、私たちの罪がもたらす結果は死だからです。¹⁴⁵ こうして、正しい方が正しくない者たちのために死なれたのです。私たちの身代わりとして。

あなたはもう家に帰ってきましたか。まだためらっていますか。父は毎日、あなたを待ちわびて遠くを見つめておられます。父はあなたを待っておられるのです！

神の恵みの福音

私たちはみな罪人だ、ということを何度も読まされて、まだ耐えられますか。腹を立てても当然ではないか、と思われるでしょうか。信じてくださ

139. ローマ人への手紙8章14、19、29節、ガラテヤ人への手紙4章6節

140. コリント人への手紙第二8章9節

141. ローマ人への手紙8章32節

142. ヘブル人への手紙10章19～22節、ペテロの手紙第一3章18節

143. ルカの福音書15章11～24節、エペソ人への手紙2章13、18節

144. ヨハネの手紙第一1章3～4、7節

145. ローマ人への手紙6章23節

い。問題は、私たちがけなすことではありません。この診断を下しているのは聖書です。聖書は真理を語っています。そして、真理は私たちが自由にするのです。

自分が罪人であると認め、それに同意するとは、こういうことです。私たちは、とことんしくじってしまった。それは修理のしようがない。出口はない。私たちの状況は深刻だ。私たちは死を逃れることはできない。もし、ゴルゴタの十字架とイエスの恐ろしい死が、私たちをこの状況から解放するために必要だったのだとしたら、私たちの状況がどれほど致命的なものであるに違いないかを、少しは想像することができるでしょう。断言しますが、あなたがそれを本当に理解するのは、救い主を知ったときです。安全な側にたどり着いたときなのです。

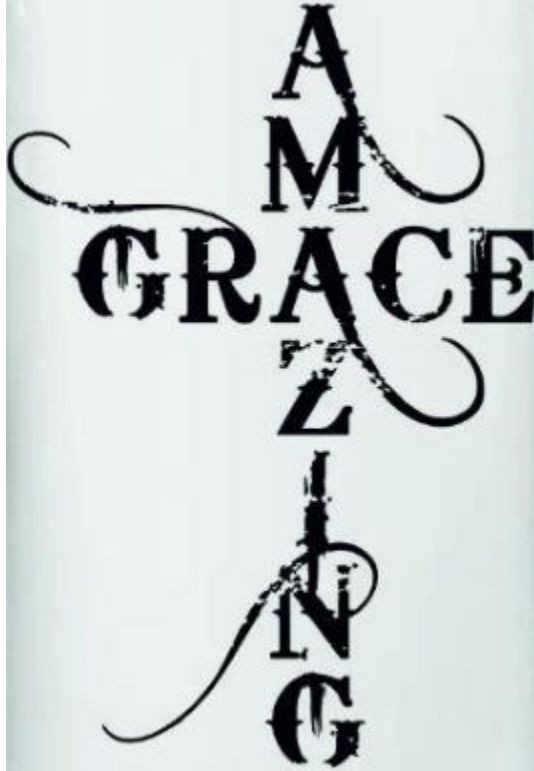
凍りついたボーデン湖を、それとは知らずに馬で渡りきった騎士の話をご存じかもしれません。¹⁴⁶ 湖の向こう岸に着いたとき、人々は彼に、どこを通過して来たのかを告げました。彼は愕然として倒れました。凍った湖の上での死の危険に気づいたのです。それはまさに、ある人に天が開かれ、神の恵みが心に照り輝くときの状況と同じです。その人が、恵みによって救われた！¹⁴⁷ ということばを聞くときです。人は振り返って、自問します。自分はどこにいたのか。深淵の上だ！ 命の危険の中だ。自分にできる最も愚かなことだった。滅びに定められていたのに、今は安全なところにいる。あなたは尋ねるでしょう。私たちは本当に、それほど大きな危険の中に生きているのか、と。そうです。私たちは死の敷居の上に生きており、滅びに定められているのです。

救いはあります。私たちの贖い主を見上げてください！ あの十字架の上におられる方を！ あなたの罪を負わされている方を！ 私たちの失われた、没収された人生は、キリストにおいて十字架に釘づけにされたのです。私たちがそれから解放放たれるためです。この知らせを聞いて心を揺さぶられない人は、まだ神のことばを理解していません。自分が罪人であることを理解

146. グスタフ・シュヴァープ (Gustav Schwab) のバラード「Der Reiter und der Bodensee」(1826年)によるものです。

147. エペソ人への手紙2章1～10節

できるのは、失われた人ではなく、救われた人なのです。自分が罪人であるという認識は、神の恵みが思いがけず人の心に入り込むとき、救いの喜びへと変わるのです。



私たち自身についての真理と神の恵みが、私たちを自由にするのです！¹⁴⁸ あなたはあの歌をご存じで、そのメロディーを愛しておられるかもしれません。でも、その歌詞に注意深く耳を傾けてください。私たちのテーマを的確に言い表しているのです。

Amazing Grace how sweet the sound! That saved a wretch like me! I once was lost, but now am found; Was blind but now I see.

148. ヨハネの福音書8章32節

驚くべき恵み、なんと甘美な響きだろう。私のような悪党を救ってくれた！
かつて私は失われていたが、今は見いだされた。盲目だったが、今は見える。

これが、この歌の第一節です。この歌は、キリストを自分の贖い主として見
いだした元奴隷商人（ジョン・ニュートン [John Newton]、1779年）に
よって作られました。いや、むしろキリストによって見いだされた人によっ
て、と言うべきでしょう。

初めから終わりまで恵み

イエスは恵みのことばを語られました。¹⁴⁹ 人を断罪し、打ち壊すようなこと
ばではありません。人を立ち上がらせ、勇気づけ、赦しを与えることばで
す。ですから、福音は恵みの良い知らせ以外のものではありません。¹⁵⁰ 恵
みとは、私たちが神に背を向けていたにもかかわらず、永遠なる方が私たち
人間のところまで身を低くし、私たちに心を向けてくださることです。恵み
は、無理やり手に入れることはできません。それは、自由に、喜んで与えら
れるものなのです。

恵みが私たちを救いました。私たちは神に何一つ差し出すことができません
でした。私たちには、償いをする力がまったくないからです。私たちにでき
たのは、自分が何者であるかを認め、受け入れることだけでした。そして、
神がどなたであるかを。神の義を認めるとは、私たちが義ではないと認める
ことなのです。

神は正しい審判者です。¹⁵¹ 今日の私たちの法制度では、裁判官は法律違反を
裁き、法律に基づいて刑罰や制裁を科します。けれども、犯罪は直接裁判官
に向けられているわけではありません。神の場合は違います。私たちの創造
主——その方は私たちの審判者でもあります——に対して、私たちは罪を犯

149. ルカの福音書4章22節

150. 使徒の働き20章24節

151. 使徒の働き10章42節、17章31節、ローマ人への手紙2章3、16節、3章6節、14章10節、テモ
テへの手紙第二4章1節、ヘブル人への手紙10章30節、ペテロの手紙第一1章17節、4章5節、ヨハ
ネの黙示録11章18節、20章12節

したのです。¹⁵² 私たちは何を覚悟しなければならないのでしょうか。¹⁵³

ところが、有罪判決を回避するためにすべてをしてくださったのは、ほかならぬ審判者ご自身なのです。¹⁵⁴ 神は、その愛と人を救う義のうちに、イエスにおいて私たちに会ってくださいました。イエスの生涯と死において。十字架の上でのイエスのいけにえ、イエスの血は、私たちの罪を永遠に覆います。¹⁵⁵ これは、福音を自分のものとして受け取り、神が自分のためにしてくださったことを信じる¹⁵⁶すべての人に当てはまります。¹⁵⁷

これが神の恵みです。¹⁵⁸ 正当な有罪判決が、私たちから取り除かれること。別の方が私たちの代わりに立ってくださるからです。その方は、私たちの罪と、私たちの罪深い存在とを、ご自分の死の中へと負って行かれるのです。

¹⁵⁹

恵みとはまた、私たちが受けるに値しないものを贈られることでもあります。私たちが受けるに値しないものを、さらにはるかに多く与えてくれる恵みです。¹⁶⁰ これこそ、その神¹⁶¹なのです。恵みの福音において宣べ伝えられている神です。¹⁶²

恵みの福音は、あらゆる宗教と異なっています。キリスト教という宗教とも異なっています。恵みは、あらゆる宗教の終わりです。善いことをする義務を負い、救いや永遠のいのちという報酬を得るために成果を上げる義務を負っている——そういう宗教の終わりなのです。イエスにおいて、この成果は私たちのために満たされています。イエスにおいて、すべてが私たちに与え

152. ローマ人への手紙3章23節

153. ルカの福音書18章13節

154. ヨハネの福音書3章17節

155. ヨハネの手紙第一1章7節、ヨハネの黙示録1章5～6節、5章9～10節、ヘブル人への手紙9章12～15節

156. ローマ人への手紙1章16節

157. ローマ人への手紙5章8～10節

158. ヨハネの福音書1章14～17節、ローマ人への手紙5章9、15節、コリント人への手紙第二8章9節、エペソ人への手紙1章7節、2章5、13節、テトスへの手紙2章11節

159. テサロニケ人への手紙第一5章10節、テトスへの手紙2章14節、ヨハネの手紙第一2章2節、3章16節、4章10節、ペテロの手紙第一2章24節、3章18節

160. ルカの福音書15章22節、エペソ人への手紙2章7節

161. ペテロの手紙第一5章10節

162. ミカ書7章18節

られています。私たちは自分の力ではそれを成し遂げることができません。恵みは無償であり、自由に与えられ、自分の働きによって得ることはできません。ある人々にとっては、自分自身の、しばしば無意識の高慢が妨げになっています。この大いなる恵みの贈り物を、信仰をもって受け取ることは難しいのです。私たちは、成果主義にどっぷりと浸かっています。人が恵みを受け入れ、もはや自分自身や自分の成果に頼らなくなるとき、それは突破口であり、解放です。そして、神と人の前で、自分が成し遂げた善いことを持ち出さなくなるときも。

福音は、ほかの何とも取り違えようのないものです。それはつまりき（スキャンダル）です。あらゆる宗教や救いの提案と正反対のものです。福音はこう宣言します。すべての人は罪人である。十字架につけられた一人の方が私たちの救いである。贖いは、受けるに値しない恵みの贈り物としてのみ存在する。無償で。それが神の知恵なのです。

人が恵みを受けるのは、初めて神に恵みを願い求めるその瞬間だけではありません。恵みは、そのときから人生のあらゆる時に、その人について行きます。恵みはキリスト教のトレードマークです。恵みなしでは何も成り立ちません。恵みは、イエスに従う歩みをあらゆる面から満たし、包み込みます。恵みが私たちを支えるのです。律法の要求や奴隷監督の要求ではありません。恵みは要求しません。恵みは自らを与えるのです。イエスに従う歩みは、恵みによって成り立ちます。贈り物を受けた者として、絶えず受け取り続ける者として。恵みは、イエスに従う歩みの始まりの日も最後の日も包み込んでいます。恵みなしに、忠実さも、イエスに従う歩みも考えられません。



神は愛です

その存在全体が愛である、と言える人がいるでしょうか。徹底的で、無私で、自分をささげる愛です。あなたは、そのような人に出会ったことがありますか。私はありません。善良で、模範的な人々は知っていますが。

神については、そう言われています。イエスにおいて、私たちは、この超越的で、この世を超えた、永遠の愛が本当に存在するという証拠を手にしています。そして、その愛が私たちの世界の中に現れたという証拠を。私たちは、このような神を知るにふさわしい者だったのでしょうか。

先ほど、神の恵みについて述べました。神は恵み深い方です。それは、私たちの救いを意味する神のご性質です！ では、なぜ神は恵み深いのでしょうか。神が愛そのものだからです。¹⁶³ 恵みの源は神の愛です。その愛は、川の流れのように私たちのところへ流れて来て、最も低いところに達したときに初めて止まるのです。

163. ヨハネの手紙第一4章7～11節

神はいつも愛であられました。愛には、愛するための相手がいます。父は、宇宙が存在する前から御子をお愛しておられました。¹⁶⁴ 互いに向き合う永遠の愛のうちに、父と子と御霊、三位一体の神は存在しておられたのです。始まりなしに。神は孤独ではなく、独りぼっちでもありませんでした。神は、私たちが考えるよりも、もっと大きく、もっと偉大な方です。神の愛もまたそうなのです。

ある人の愛の深さは、その人が愛する者のためにどれだけ犠牲を払う覚悟があるかによって測ることができる、と考えるなら、福音の物語の中に表されている愛は、比類のないものです。それは、計り知れない愛から、極限まで進む覚悟のあった神の物語なのです。自ら神の敵となってしまった人々を救い、回復させるためにです。

私たちへの愛のゆえに、聖なる神は極限まで進まれました。御子は私たちの罪を負われました。¹⁶⁵ 御子は、罪の中にひそんでいる「神に見捨てられること」を経験されました。だからこそ、イエスは十字架の上で叫ばれたのです。わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。¹⁶⁶ 神は、これ以上先へ進むことはできません。ゴルゴタで与えられた以上のものを与えることはできません。だからこそ、十字架は神の最大の啓示なのです。愛する者がこれ以上のものを与える物語は、ほかにありません。しかも、それを受けるに値しない人々のためにです。¹⁶⁷

この愛を、どうしたら理解し、説明することができるのでしょうか。私たちの社会は、この言葉をよく使います。まさにインフレを起こしているほどです。けれども、社会はそれによって正確には何を意味しているのでしょうか。だれをもあるがままに受け入れる愛。無条件の愛。裁かず、断罪しない愛。すべてを容認し、調和を求める愛。何の期待も持たない愛。ロマンチックで感傷的な愛。

この描写は、聖書の愛の概念とぴったり重なるのでしょうか。

164. ヨハネの福音書17章24節

165. コリント人への手紙第二5章21節

166. マルコの福音書15章34節

167. ローマ人への手紙5章8節

もしそうだと考えてみましょう。神は、人間のすることを何でも容認される。批判も裁きもされない。それはどこに行き着くでしょうか。そして、そのような愛は、本当のところどれほど愛に満ちたものなのでしょうか。

神の愛は私たちをあるがままに受け入れる、と信じるなら、私たちが罪人であることを忘れていくことになります。私たちが今日、神が望まれるように、また私たちにとって最善であるようには生きていないことを忘れていくことになります。親の立場に身を置いてみてください。あなたは母親か父親かもしれません。成人したあなたの子供を思い浮かべてください。その子は、良くないことをしています。自分自身と他人を傷つけることをしています。そのうえ、あなたとの連絡を絶ってしまいました。あなたを憎み、根拠のない非難をあなたに浴びせています。

それでも、その子はあなたの子供です。あなたは、その子を愛することをやめません。けれども、その子の人生の中にある悪は拒みます。今のような状態であることに、あなたは怒り、悲しみます。あなたが悪いことを良しとすることは決してないでしょう。私たち人間の経験においてさえ、愛と拒絶は、どこかで結びついているものなのです。悪を退け、断罪するのは、愛なのです。

神は、私たちが今のままでい続けられるように、私たちをあるがままに受け入れなければならない——そう言えるでしょうか。たとえ他の人々がそのために苦しみ、害を受けるとしても、神は本当に私たちの生き方を受け入れるべきなのでしょうか。

限りがあり、多くの点で不自由な人間である私たちは、平和と正義が当たり前である世界を切に求めています。では、地と人間を造られた方は、どれほどそれを切に求めておられると思いますか。もし神が、憎しみや不正に対して、また神のかたちに造られた人間に罪がもたらす暴力や悲惨に対して怒られないとしたら、神は愛の神ではないでしょう。ただの無関心な傍観者にすぎないでしょう。もし神が罪を、人間の悪を断罪し、裁かれなかったら、神はそれを黙認し、大目に見て、是認していることになるでしょう。罪の破壊的な力に対する神の反応は、常に怒りと裁きなのです。

神の愛は聖なる愛です。それは、私たちがしばしば愛と理解しているものとは異なります。神の愛は、神的で、限りなく、無条件です。それは純粹です。何もしない、ロマンチックで感傷的な愛ではなく、強い意志を持った救い主の愛なのです。

神の愛は、神の怒りと裁きを排除しません。神に感謝します。私たちに与えられるのは、私たちをあるがままに受け入れなければ満足できないという、ただの「優しい神さま」ではありません。聖書の神は、私たちを変え、愛によって引き出し、ご自分のもとへ引き寄せたいと願っておられます。神は、罪人が変わる前から、その人を愛しておられます。罪のただ中にいるその人を愛しておられるのです。¹⁶⁸ けれども、神はその人を変え、聖め、イエスに似た者になりたいと願っておられるのです。



見えない世界——闇の力

もう一度、十字架刑に話を戻しましょう。それには、目に見えない悪しき力も決定的に関わっていました。イエスは、地上におられた間に、それらの力と対決されました。力強い解放者として！¹⁶⁹ 悪霊、つまり汚れた霊たちを、イエスは追い出し、敗走させられました。それによってイエスは、彼らの力が終わりを迎えつつあることを宣言されたのです。福音は、具体的にこれらの力と関わっています。多くの人が考えている以上にです。

168. ヨハネの福音書3章16節、ローマ人への手紙5章8節、コリント人への手紙第二5章14節、エペソ人への手紙2章4～5節、テトスへの手紙3章4～5節、ヨハネの手紙第一4章7～10節

169. マルコの福音書3章27節

これらの力とは何者で、なぜイエスの死を望んだのでしょうか。神は、地と人間を造られる前に、御使いたちを造られました。¹⁷⁰ 彼らは時に「神の子ら」と呼ばれます。¹⁷¹ それは神の天の家族です。さまざまな位階にある、さまざまな御使いたちが、それぞれ異なる務めを持っています。神は、彼らと共に宇宙を治めるために、ご自分のために彼らを造られました。彼らは神に仕える者たちです。¹⁷²

私たち人間と同じように、彼らにも、創造主に忠実であるかどうかの自由がありました。御使いたちの一部は、別の道を選びました。神なしの存在を選んだのです。¹⁷³ その首領が悪魔、サタンでした。¹⁷⁴ 目に見えない世界でこの反乱が起きたとき、神は彼らを滅ぼされませんでした。それ以来、これらの御使いたち、神の子らは、サタンの指揮の下で、神がなさるすべてのことに敵対して働いています。¹⁷⁵ 彼らに対しているのは、忠実であり続けた御使いたちです。¹⁷⁶

諸力と人間

人間が造られた後、誘惑者であり人殺しである者¹⁷⁷が、すぐに姿を現します。¹⁷⁸ 古い蛇であるサタン¹⁷⁹は、最初の人間たちを誘惑して、もはや神を信頼せず、神の善意を疑うように仕向けます。

サタンは、神のかたちに造られた人間をねたみました。サタンは、ただ破壊しようとしてしました。神が地上に人間の家族を持つことを妨げようとしたのです。サタンは人間を自分のものにしようとしてしました。良い父としてではな

170. ヨブ記38章4～7節、詩篇148篇2、5節、コロサイ人への手紙1章16節

171. ヨブ記1章6節、38章7節、詩篇82篇

172. 詩篇104篇4節、ダニエル書6章22節、マタイの福音書1章20、24節、16章27節、ルカの福音書2章13節、使徒の働き8章26節、10章7節、12章8節、ヘブル人への手紙1章7節、13章2節

173. ペテロの手紙第二2章4節、ユダの手紙6節

174. マタイの福音書25章41節、エペソ人への手紙2章2節、ヨハネの手紙第一3章8節、ヨハネの黙示録12章7～9節

175. ローマ人への手紙8章38節、コリント人への手紙第二11章14節、12章7節、エペソ人への手紙6章10～17節、ヨハネの黙示録12章13節、ヨハネの黙示録13章

176. テモテへの手紙第一5章21節、ヨハネの黙示録5章11節、7章11節、12章7節

177. ヨハネの福音書8章44節、ヨハネの手紙第一3章8、12節

178. 創世記3章1～7節、コリント人への手紙第二11章3～4節

179. ヨハネの黙示録12章9節

く、奴隷の主人、暴君としてです。この強奪は成功しました。楽園の園での出来事以来、人間はもはや神の近くにはいないのです。¹⁸⁰

人類の歴史の歩みの中に、これらの目に見えない力の影響を見ることができます。それは、あらゆる民族の数えきれない偶像崇拜の中に、見過ごしようもなく現れています。その一部は今日まで続いています。¹⁸¹ 新約聖書は、神なしに、神から切り離されている人間が、靈的に悪魔に捕らわれ、縛られていることを明らかにしています。¹⁸² 外からはそれは見えません。人々自身もそれに気づいていません。彼らは自分が自由だと感じています。もし彼らが、私たちを取り囲み、私たちのただ中にある見えない世界をのぞき見ることができたなら、彼らの目は開かれるでしょう。神について、自分自身について、そして福音についての彼らの考えは、暗くされています。¹⁸³ 世界は実際、今もなおサタンの王国なのです。¹⁸⁴ イエスはサタンを「この世を支配する者」と呼んでおられます。¹⁸⁵ パウロはサタンを「この世の神」とさえ呼んでいます。¹⁸⁶ サタンは大きな力を持ち、世界の出来事に破壊的な影響を及ぼしています。そうでなければ、世界の状態はほとんど説明がつかません。人間自身が悪であるという事実が、事態をさらに悪化させ、出口のないものになっているのです。¹⁸⁷

目に見えない世界がこれほど現実的であると、あなたは思っていたでしょうか。そして、それが私たちとこれほど深く関わっていると。

福音と諸力

イエスが来られたとき、神の王国が、悪しき力の支配領域であるこの世界に突入しました。それは、悪魔とその使いたちの終わりの始まりでした。神の基本計画が動き出したのです。イエスがガリラヤを巡っておられたとき、悪

180. 創世記3章23～24節

181. コリント人への手紙第一10章20～22節

182. 使徒の働き26章18節、エペソ人への手紙2章1～3節、コロサイ人への手紙1章13節

183. コリント人への手紙第二4章3～5節

184. マタイの福音書4章8～10節

185. ヨハネの福音書12章31節、14章30節、16章11節

186. コリント人への手紙第二4章4節

187. マルコの福音書7章20～23節

霊たちは、自分たちがだれを相手にしているのかを知っていました。¹⁸⁸ 人間たちとは違って。彼らは、目に見えない世界からイエスを知っていたのです。イエスは彼らの創造主だったからです。

イエスが洗礼を受けられた直後、サタンは荒野でイエスの前に立ちただかり、イエスを試みました。もしイエスが自分を拝むなら、世界の国々を与えようと持ちかけたのです。サタンは自分の栄誉を、自分への礼拝を求めます。それがサタンの本質です。¹⁸⁹ しかし、イエスはサタンに抵抗されます。エデンでのアダムとは違って。¹⁹⁰

イエスは、ご自分の弟子たちにも、悪霊に対する権威を持ち、悪霊を追い出す力をお授けになりました。¹⁹¹

いいえ、これらはホラー話でも、単なる心理的な現象でもありません。日常の現実なのです。そうした力は、まさにそこで現れます。人が積極的にそれらに心を開き、身をゆだねるところでは、なおさらです。

諸力と神の救いの計画

神の救いの計画は、悪魔にも人間にも知られていませんでした。それは、旧約聖書の多くの預言にもかかわらず、見分けるのが難しいものでした。¹⁹² 弟子たちもそれを理解していませんでした。神の御子が、力も王座もない一人の人間として現れたことは、諸力を困惑させました。この状況で彼らにできる唯一のことは、人間たちを操ってイエスを殺させることでした。¹⁹³ 人間としてのイエスは、傷つきうる、死ぬべき存在だったからです。ですから、彼らの目的はただ一つ、イエスの死でした。彼らはそれを成し遂げました！けれども、彼らは思い違いをしていたのです。イエスの死こそ、イエスの勝

188. マルコの福音書1章23～24節、3章11節、5章7節

189. マタイの福音書4章1～11節、ルカの福音書4章1～13節

190. ローマ人への手紙5章12～21節

191. マルコの福音書6章7節

192. コリント人への手紙第一2章6～9節

193. ルカの福音書22章53節

利だったからです。¹⁹⁴ イエスの死は、私たち人間のための、宇宙的な力関係の転換でした。

イエスの死は、人々を闇の力から解放するための贖いの代価です。イエスの死は、人々に恵みと赦しをもたらしました。解放をもたらしました。当時の奴隷市場が、そのことのたとえです。贖いとは、奴隷の身分から買い取られ、自由の身にされることを意味していました。イエスのよみがえりと神の御座への高挙は、罪と死と悪魔への隷属から自由へと至る扉なのです。

私たちには、罪の赦しと、罪の力からの解放が必要でした。その両方が、十字架によって私たちに与えられるのです。

悪魔は恵みを知りません。悪魔自身は神の恵みを経験しません。¹⁹⁵ そして人間に対しても、悪魔は恵みというものを知りません。恵みは悪魔の本質とは無縁のものです。神に対する反逆が、悪魔を完全に苦々しい存在にしてみました。

今や、一人の人間が神の御座に着いておられます。私たち人間のためにです。そして私たちは、この方と一つにされています。¹⁹⁶ 私たちはキリストのうちにいるのです！¹⁹⁷ 諸力は打ち負かされました。彼らの時は尽きました。彼らの日々は数えられています。けれども、彼らはまだ抵抗し、福音を食い止めるために負け戦を戦っています。毎日、これらの力は、人々が解放されていくのを目にしています。福音を信じる一人ひとりが、神の救いの計画が目標に到達することを彼らに思い起こさせるのです。神は、地のすべての民族から成るご自分の家族を持たれます。それは、彼らがその死に決定的に関わったイエスによって実現するのです。彼らは、いわば、イエスが死なれたゴルゴタで、それとは知らずに自分たちの墓を掘ったのです。

神と人間に敵対する諸力が拠り所としている債務証書、告発状は、十字架に釘づけにされ、無効にされました。¹⁹⁸ 十字架によって、キリストは諸力の

194. ヘブル人への手紙2章14節

195. ヘブル人への手紙2章16節

196. エペソ人への手紙2章6節

197. ローマ人への手紙8章1節、コリント人への手紙第一1章30節

198. コロサイ人への手紙2章14～15節

武装を解き、そこで彼らをさらし者にされたのです。よみがえられたキリストは、今や宇宙の主です。¹⁹⁹ 良い知らせとはこうです。キリストは、すべての人、すべてのものの主です。キリストを信じる人は解放されています。²⁰⁰ その人は、神の王国という家に帰るのです。

福音とは、神がご自分の人々を取り戻し、ご自分の家族を持とうとしておられるという、神の良い知らせです。死から、そして悪しき力から解放された家族です。イエスが十字架の上の死によって、このすべてを可能にしてくださったという、うれしい知らせです。イエスは悪魔のわざを打ち壊すために来られました。²⁰¹ イエスと共に、神の愛の支配が到来しました。私たちは、救い出されて、イエスの愛の王国へと移されるのです。²⁰²

十字架の勝利

ローマの将軍たちは、厳かな凱旋行列を組んでローマに入城しました。打ち負かされた敵の首領たちは、鎖につながれて引き連れられました。処刑される前に、彼らは公衆の前でさらし者にされたのです。パウロは、この世を支配する者の領域に属する支配と権威に対する十字架の抗しがたい力を、このように描いています。²⁰³ 武装を解かれ、さらし者にされたのです。彼らの力はまだ失われています。

十字架につけられた方は、目に見えない中間の世界の魔術的な力から人を自由にします。サタンは裁かれました。その力は打ち砕かれました。イエスに属する人々に対して、サタンはもはや何の力も持っていません。

神の救いの計画は、長く続くチェスの対局のようなものです。勝敗はわかりません。やがて対局者の一人が一手を指し、通の人には、これで勝負が決まったとわかる——そういう瞬間が来るまでは。たとえ対局がまだ続けられているとしてもです。光と闇の戦いも、それと同じです。王（キング）による

199. マタイの福音書28章18節

200. ヨハネの福音書8章33～36節、ローマ人への手紙6章7、18、22節

201. ヨハネの手紙第一3章8節

202. コロサイ人への手紙1章13～14節

203. コロサイ人への手紙2章15節

決定的な一手は、すでに指されました。ゴルゴタの十字架の上の、いばらの冠をかぶった王による一手です。勝利は成し遂げられました。

敵対者の活動は、もはや退却戦にすぎません。敵対者に残された時間はわずかです。その終わりは、すでに決まっているのです。

十字架という厄介ごと（Das Kreuz mit dem Kreuz）が、十字架の勝利となる！

自由は可能です

ですから、確信してください。あなたがイエスのものであるなら、悪霊は逃げ去らなければなりません！ もしあなたが、魔術やオカルト、霊や天使といったものに関わってきたとしても、自由があります。そして赦しがあります。

これらの力は、あなたを手放そうとはせず、自由になろうとするあらゆる試みを芽のうちに摘み取ろうとします。イエス・キリストに祈ってください——イエスの御名を呼び求めてください！ あなたのために祈り、あなたを助けてくれるキリスト者を探してください。

このオカルトの世界とあなたを結びつけているすべてのものと、声に出して縁を切ってください。

こうした魔術的、オカルト的なものとあなたを結びつけるものは、すべて処分してください。あなたをそのような行為や関係に引き込んだ人々とは、一切の接触を断ってください。

目に見えない世界は、侮ってはならない力強い現実です。しかし、イエスのほうが強いのです。

平和の福音

ペテロは、自分の師が平和を宣べ伝えるのを経験していました。²⁰⁴ イエスは、ユダヤ人にも、諸国の民、つまり異邦人にも平和をもたらされました。

204. 使徒の働き10章36節

そして、その両者の間にも。平和は、福音の中心的で本質的な側面です。²⁰⁵ それは神のシャローム（平和）です。ヘブル語聖書では、その言葉はそう呼ばれています。神の心は大きく、広いのです。その心から平和が来ます。それは、全きものであること、健やかであること、損なわれていないこと、救われていることを意味します。福音は人々を神との平和へと導きます。²⁰⁶ それは、神との和解であり、あらゆる敵意の終わりを意味するのです。²⁰⁷

福音は、自分が神に神の子どもとして受け入れられているという確信へと導きます。この確信は、神のうちに錨を下ろしています。神がどのような方であり、何をしてくださったかに根ざしているのです。この土台の上で、本物の、永続する平和が心の中に広がっていきます。不安の代わりに安らぎが。不和と恐れのために平和が。

大きなことでも小さなことでも、戦争と争いに満ちた私たちの世界は、平和を必要としています。²⁰⁸ 単に戦争がない状態ではなく、単なる停戦でもなく、人々を引き合わせ、一つにする平和です。²⁰⁹ 福音は人々の間に平和をつくり出します。平和が支配する、人々の新しい共同体をつくり出すのです。²¹⁰ 神が人間の暴力をただ一度で永遠に吸収してくださった十字架の宣教こそ、世界の平和への鍵となりうるのではないのでしょうか。そして、まず教会そのものの平和への鍵に。

人々が平和とは何かを知りたいと思うなら、福音を通して神の平和を受け取った人々のもとで、それを知るべきでしょう。神の平和を放ち、分かち合い、平和をつくる人々のもとで。彼らは、自分にできるかぎり、²¹¹ すべての人と平和に暮らすのです。

イエスによって、すべてのものは神と和解させられ、神との正しい関係に再び置かれました。イエスの血という代価によって。ゴルゴタでのイエスの死

205. コロサイ人への手紙1章20節、エペソ人への手紙2章17節、6章15節

206. ローマ人への手紙5章1節

207. ローマ人への手紙5章10節、コリント人への手紙第二5章18節

208. テトスへの手紙3章3節

209. マタイの福音書5章44節、ヨハネの手紙第一4章19節

210. エペソ人への手紙2章14～22節

211. ローマ人への手紙12章18節

によって。神との平和と神の平和が現実となるために、十字架は必要だったのです。²¹²

あなたは、この平和をどのように経験してきましたか。それは、あなたの内に、あなたの人間関係の中に、どのような変化をもたらしましたか。

福音——成就した約束

福音は、手に負えなくなった人類の歴史に対して、神が驚いたり、途方に暮れたりして示された反応ではありません。福音は神の心から出たものであり、永遠の昔から約束されていたものです。²¹³ ですから、それがすでにヘブル語聖書、つまり聖書の第一部である旧約聖書に深く根ざしているのは、驚くべきことではありません。そこで福音は約束されているのです。²¹⁴ 旧約聖書には、神の救いの歴史が、**時が満ちる**と呼ばれる時点に向かって進んでいく様子が描かれています。神がご自分の御子を遣わされた時です。²¹⁵ イスラエルにいたイエスと同時代の人々の大部分は、イエスが約束の成就であることに気づきませんでした。²¹⁶ けれども、十二弟子、使徒たちは、間もなくそれに気づきました。もっとも、それはイエスの死とよみがえりの後のことでしたが。使徒の働きや彼らの手紙に記されている彼らの福音宣教は、旧約聖書からの引用に満ちています。²¹⁷ 例はたくさんあります。イエスご自身も、聖書、つまり旧約聖書はご自分について語っていると言われました。²¹⁸ ここで、旧約聖書から三つの短い例と、いくつかの聖書箇所を挙げておきましょう。²¹⁹

212. コロサイ人への手紙1章20節

213. ローマ人への手紙16章25～27節、テモテへの手紙第二1章9節、テトスへの手紙1章2節

214. ローマ人への手紙1章1～3節、ガラテヤ人への手紙3章14～16節

215. ガラテヤ人への手紙4章4節

216. 使徒の働き13章27、32節

217. 使徒の働き2章25～31節、ローマ人への手紙1章17節、3章21～26節、4章17節、10章8～13節、15章9～13節、コリント人への手紙第一2章9節、コリント人への手紙第二6章2節、ガラテヤ人への手紙3章16節、ペテロの手紙第一1章19節、2章6～9節

218. ヨハネの福音書5章39節、7章42節

219. 詩篇16篇8～10節、22篇、31篇13節、35篇11節、69篇4節、イザヤ書9章2～7節、11章1節、35章4～6節、50章6節、53章、ミカ書5章2節、ゼカリヤ書11章12節、ダニエル書9章25～26節

すでに聖書の最初のページに、人間が神の戒めに背いた後で、原福音と呼ばれる約束があります。わたしは、おまえと女の間に、また、おまえの子孫と女の子孫の間に、敵意を置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。²²⁰ 当時はほとんど見分けられなかったことが、イエスの光の中で、イエスの生涯と死の光の中で明らかになります。イエスは、死ぬことによって悪魔に打ち勝たれたのです！²²¹

人類の歴史の時間軸を何年も先へ進むと、アブラハムが、妻サラと共に登場します。この年老いた、子のない夫婦が、男の子が生まれるという約束を受けます。それは、二人が幸せになるためだけではありません。そうではなく、この男の子イサクにおいて、地のすべての民族が祝福されるためなのです。²²² これは、イエスにおいて成就する約束です！²²³

何世紀も後に、ダビデがイスラエルの王となります。神の心にかなった人です。神の戒めに背いたことはありましたが、ダビデはいつも神に忠実であり続け、一度も偶像を拝みませんでした。神はダビデに、永遠の王座を持つことになる一人の子を約束されます。²²⁴ それはソロモンのことだけではありませんでした。その約束は、ダビデの子イエスにおいて完全に成就したのです。イエスにおいて、何世紀も前からの預言が成就します。一人の王、ダビデの王家の直系の子孫が、イスラエルのメシア王となる。永遠に。そして、そのとおりにになりました。²²⁵ イエスは今、神の御座に着いておられ、間もなく、すべての人に見える形で世界を治められるのです。

これほど多くの預言が自分について語られていると言える人は、ほかにいません。多くの預言があります。その多くは、すでに正確に成就しています。旧約聖書全体が、イエスを指し示しています。旧約聖書は、神の御子の福音の最も重要な証人なのです。

220. 創世記3章15節

221. ヘブル人への手紙2章14節、ローマ人への手紙16章20節、ヨハネの黙示録12章9～11節、20章10節

222. 創世記12章3節、22章18節、28章14節

223. ガラテヤ人への手紙3章16節

224. サムエル記第二7章12～16節

225. ルカの福音書3章23～31節、創世記49章10節、エレミヤ書23章5～6節、詩篇132篇11節、ローマ人への手紙1章3節、テモテへの手紙第二2章8節、ヨハネの黙示録5章5節



福音の希望

十字架につけられた人がよみがえることができるなら、私たちすべてに希望があります！ それは確かな希望です。十字架につけられた一人の方が、私たちのために死者の中からよみがえられたからです。神の御子です。この方が、私たちに希望を取り戻してくださいました！

私たちはみな、希望や夢を持っています。少し時間をとってみてください。あなたには、望んでいる未来がありますか。今の経験よりも良い何かについてのビジョンがありますか。いつか現実になってほしいと願っている希望がありますか。

福音は、新しい地平を切り開きます。私たちは生きるのです！ 永遠に。死が最後の言葉を語るものではありません。福音は希望を広めます。²²⁶ ですから私は、それを好んで新しい創造の福音と呼んでいます。福音は、今のままであり続けることはないと約束しています。²²⁷ 神は、被造物全体に対して真

226. ペテロの手紙第一1章3～4節

227. ローマ人への手紙8章18～24節

剣に向き合っておられます。²²⁸ 人間だけのことなく、惑星全体のことなのです。神の王国は、一方では王に仕える人々から成っています。しかし、この王国が存在する場所もあります。その場所とは、私たちの地球です。²²⁹ 宇宙の中の小さなちりの一粒にすぎないこの地球に、神はイエスにおいて来られたのです。

神が地球を造られました。それは神の心からのプロジェクトです。すべては非常に良かったのです。²³⁰ ですから神は、将来のために、まったく別のものや新しいものを考え出されるわけではありません。そうではなく、神は地球を、あるべき姿に回復されるのです。言い換えれば、神は地球を新しくされるのです。²³¹ いつの日か、そこには死も病も飢えもなくなります。²³² 人間が破壊するもの、人間に害を及ぼす荒れ狂う自然も含めて、そうしたものはすべて、もはや存在しなくなります。²³³

希望のない壊れた世界の中で、²³⁴ 希望の福音が、²³⁵ 永遠で揺るがない王国を²³⁶ 約束しているのです。新しい天と新しい地が、私たちの新しい住まいとなるのです。

希望は、よみがえられた方のうちにしっかりと錨を下ろしています。死んでいたが、永遠に生きておられる方のうちにです。²³⁷ この方は死の力を打ち破られました。²³⁸ この方によって、真のいのちと朽ちないものが明らかにされました。²³⁹ キリストにおいて、私たちは、二度と死ぬことのない、もはや罪とは何の関わりもないキリストの復活のいのちを、自分のいのちとして

228. ヨハネの福音書3章16節

229. ヨハネの黙示録5章9～10節

230. 創世記1章31節

231. イザヤ書65章17～19節、66章22節

232. ヨハネの黙示録7章9～17節、21章1、4～5節

233. ヨハネの黙示録7章16節、22章3節

234. エペソ人への手紙2章12節、テサロニケ人への手紙第一4章13節

235. エペソ人への手紙1章18節、コロサイ人への手紙1章5、23節

236. ペテロの手紙第二1章11節、ヘブル人への手紙12章27～28節、ダニエル書2章44節、7章14、27節

237. ヨハネの黙示録1章17～18節、ヨハネの福音書14章19節

238. ヘブル人への手紙2章14～15節

239. テモテへの手紙第二1章10節

受け取っています。²⁴⁰ それこそ本物のいのちであり、新しい創造の尽きることのない力です。それは、イエスに従う人々の人生の中ですでに始まっています。²⁴¹ 彼らは、新しいいのちと生ける望みへと新しく生まれています。²⁴² 彼らはキリストにあって、すでに今、新しく造られた者です。いつの日か、彼らは新しい創造の**中で**生きようになります。²⁴³ 変えられた、不死の、栄光あるからだを持つようになります。²⁴⁴ それでも彼らは、死ぬべき人生において持っていた、取り違えようのない、神に望まれた人格であり続けるのです。

福音は、神が定められた時について語っています。²⁴⁵ そのとき、イエスは再び来られ、すべての人の目に見える形で現れます。²⁴⁶ 大いなる栄光と力のうちに来られるのです。²⁴⁷ その日は、イエスを待ち望むすべての人にとって喜びの日となります。そのとき、永遠の神の支配が始まるからです。そのとき、決して終わることのない時が始まります。神ご自身が人々と共に住まわれるときです。²⁴⁸ 人々は神を見ます。そして、想像を絶する喜びを経験するのです。²⁴⁹ それこそ、永遠の愛の神、三位一体の神が、いつも望んでこられたことです。そのとき、かつてあったどんな時よりも、さらに良くなるのです。天が、神ご自身が地上に来られ、ご自分の人々、ご自分の家族と共に目に見える形で住まわれます。永遠に。私たちは、イエスと同じようになることによって、神のかたちとなるのです！²⁵⁰

そのとき、地球は一つの大きな、いや地球規模の楽園となります。新しい、より良いエデンです。²⁵¹ そこには、誘惑する者が来ることは二度とありませ

240. ローマ人への手紙6章9～10節

241. コリント人への手紙第二5章17節

242. ペテロの手紙第一1章3節

243. ペテロの手紙第二3章13節

244. コリント人への手紙第一15章35～58節、ピリピ人への手紙3章20～21節

245. 使徒の働き17章30～31節

246. ヨハネの黙示録1章7節

247. マルコの福音書8章38節、13章26節

248. ヨハネの黙示録21章3節

249. ヨハネの黙示録22章4節

250. コリント人への手紙第一15章49～50節、ピリピ人への手紙3章20～21節、ヨハネの手紙第一3章2節

251. ヨハネの黙示録2章7節、22章1～5節

ん。罪への誘惑は、もはや存在しなくなります。

退屈になることもありません。むしろ、わくわくするような日々となるでしょう。大いなる冒険が私たちを待っています。私たちは、もともとそうあるべきだった人間になり、またそうあることができるからです。

神の新しい世界の夢

しばらくの間、神のこの新しい世界を夢見てみましょう。それについて私たちが知っていることは多くありませんが、悪いもの、否定的なもの、破壊的なものは、すべてもう存在しないでしょう。同時に、神が造られた今の地上で、私たちがすでに知っていた多くのものもそこにあるでしょう。

もはや貧困のない世界。飢えも、生存競争も、将来への不安もない世界。

奴隷制も、抑圧も、暴力も、操作も、差別も、屈辱も、犯罪も、戦争もありません。

病気も死もなく、それゆえ悲しみも涙もありません——涙があるとすれば、それはうれし涙です。

環境汚染も、災害ありません。警察も、弁護士も、裁判所も、病院も、精神科医も心理学者もいません。

退屈も、むなしい意味探しも、劣等感も、恥も、空虚さも、破壊的な依存や中毒も、失望ありません！

その代わりに、こういうものがあるでしょう。平和、人々の間の無私の愛、完全な正義、互いを完全に受け入れ合うこと、互いを大切にし、心を配り合うこと。

すべてがあるべき姿である場所。あふれ出るいのちの場所、多様性の場所、進歩の場所、自由の場所、冒険の場所、創造性の場所、絶えず新しい発見のある場所、すべてがいつも新しく、新鮮である場所です。

疲れや無気力や消耗の代わりに、力と活力と意欲がいつまでも続きます。

想像を絶する、変化に富んだ美しさの場所。人はそれを探検し、探究するのです。新しい人々と知り合い、共に祝う場所です。

時が止まる、あるいは決して過ぎ去らない場所！　美しいものが単なる過去の話ではなく、いつも現在である場所！　私たちが何も見逃すことのない場所です。

そういう場所がきっとあるはずだと私たちが思っていた場所、私たちの心がずっと前から慕い求めてきた場所です。

豊かさの場所、最高の食事の場所、最も美しい芸術と音楽の場所、最高の技術の場所。今日、人生を形づくっているすべてのものが、そこでは完成された形で存在します。

喜びの場所です。創造主が、すべての人に見える形で人々と共に住まわれるからです。そして人々は、神の守りの中で、神の祝福の中で、神の愛の中で生きるのです。父と子と御霊なる神を喜び、神を礼拝し、神を知るのです。神を愛するのです。

永遠なる方の目をのぞき込むこと、顔と顔を合わせて神を見ること——それは人間が経験しうる最大の幸せです。遅くともそのときには、このことがどれほど真実であるかを、私たちは理解するでしょう。恐れも恥もなく、解放され、信頼に満ちて、神の愛に満ちた心遣いのうちに永遠に生きること——それは何ものにも比べられません。神のまなざしが私たちに注がれるとき、私たちがずっと慕い求めてきた限りない愛が、私たちに出会い、私たちに触れ、私たちを満たし、私たちを抱きしめるのです。

いのちの水の泉から飲み、いのちの木から絶えず食べること。それは、今日「天国」と呼ばれている永遠を表す一つのイメージです。

そこで、神の御前で、私たちは、もともとそうあるべきだった者となります。私たち自身となるのです。神が望み、そのように成らせてくださったとおり、個性的で、唯一無二の者として。そこでは、偽りのない、本物の者として。

そこでは、すべての人が、最良の意味で、愛と心遣いをもって地を治め、²⁵² こうして最初の人間たちに与えられた使命を果たすことになります。被造物の持つ可能性が、かつてないほど開花するような仕方です。想像を絶する創造性、多様性、豊かさ、楽しみのうちに。すべてが神の愛に満たされています。共に、すべてを備えてくださった父がご自分の家族と共に。²⁵³ 天と地が一つになります。私たちは、自分の幸せが信じられないほどでしょう。一万年たっても、そうでしょう。私たちは永遠にイエスと共にいるのです。本物の、深い、歓声を上げるような喜びは、終わることがないでしょう。²⁵⁴

福音とは、そこに加わり、大いなる永遠の祝宴を共に祝うようにという招待です。²⁵⁵ この知らせは、すべての人に向けて出て行きます。²⁵⁶ だれもが招かれています。²⁵⁷ 入場料はかかりません。イエスがすべてを償ってくださったのです！²⁵⁸

福音——救いをもたらす力

イエスの弟子はだれ一人、福音を恥じる必要はありません。たとえ十字架が多くの人にとって愚かなことであってもです。この知らせには力があります。それはダイナマイトのようなものです。²⁵⁹ 福音によって心を開かれた人々は、自分に働きかけるこの神の力を経験します。立ち返りが起こり、新しい人生が始まります。それは、神の力だけが生み出すことのできる人生の転換であり、人生のあらゆる領域に影響を及ぼします。²⁶⁰ この力は、オカルト的な束縛や依存症から救い出し、解放します。多くの人が、からだも心も癒やされました。人間関係が回復されていきます。福音のうちにある神の力は、ほかの何ものとも比べることができません。どんなイデオロギーも、宗

252. ローマ人への手紙5章17節、ヨハネの黙示録5章10節、22章5節

253. コリント人への手紙第一2章9節

254. 詩篇16篇11節

255. ヨハネの黙示録19章6～10節、21章6節、22章14～15、17節

256. マタイの福音書28章19～20節、コリント人への手紙第二5章15節

257. マタイの福音書22章1～14節

258. ローマ人への手紙3章24節、ヨハネの黙示録21章6節、イザヤ書55章1節

259. ローマ人への手紙1章16～17節

260. テサロニケ人への手紙第一1章5～10節

教も、哲学も、福音のような影響を及ぼすことはありません。²⁶¹

私たち人間が力を失い、途方に暮れ、自分自身も他人も助けることができないところで、²⁶² この福音は奇跡を起こします。新しく生まれるという奇跡です。²⁶³ 福音は新しいいのちを生み出します。それは、子どもが生まれることにたとえることができます。²⁶⁴

あるとき、一人の無神論者が、著名な伝道者に、神の存在をめぐる討論を申し込みました。伝道者は承諾しましたが、条件を一つ付けました。無神論によって人生が良い方向に転換した人々を、その無神論者が連れて来ること、というものです。討論は実現しませんでした。無神論によって新しい人になった人も、依存症や束縛から解放された人も、一人もいなかったからです。それに対して伝道者のほうは、自分が福音を宣べ伝えたことによって解放され、新しい人になった人々を大勢知っていました。

福音は、どんな人の前でも立ち止まりません。福音はすべての人のためにあります。ですから、この知らせのうちに宿っている力も、すべての人のためにあるのです。それは、御子をよみがえらせたときに現された、あの神の力なのです。

これこそ、救いをもたらす現実の力です！

福音に従う

福音は人を変えます。あなたは、それを経験したことがありますか。あるいは、ほかの人の中にそれを見たことがありますか。それは本当に喜ばしいことです。突然、人々は聖書を読みたいと渴望するようになります。神の臨在を渴望するようになります。²⁶⁵ 神についてもっと知りたいと願うようになります。福音を知る前には、そのような関心はありませんでした。突然、人々

261. ヨハネの福音書8章36節、ローマ人への手紙6章18節

262. ローマ人への手紙5章6節

263. ヨハネの福音書3章3節、ペテロの手紙第一1章3節、テトスへの手紙3章4～7節

264. コリント人への手紙第一4章15節、ヤコブの手紙1章18節、ペテロの手紙第一1章23～25節

265. ペテロの手紙第一2章2節

は、神が何を望んでおられるのかを問うようになるのです。²⁶⁶

福音に対する反応は、一方では無関心や拒絶です。もう一方では信仰です。²⁶⁷ それは、福音を頭で真実だと認めることだけではなく、²⁶⁸ 人間全体の人格的な応答です。一言で言えば、**信仰の従順**です。²⁶⁹ 人々は、この知らせが自分にもたらすものを信じることによって、福音の呼びかけに従います。たとえ本人は、それを従順の一步としてではなく、贈り物を受け取ることとして感じているとしてもです。

人々は神のほうに向き直ります。神なしの人生を形づくっているすべてのものから離れます。目に見えるものであれ、目に見えないものであれ、偶像から離れます。²⁷⁰ 自分の人生の中にある罪を認め、それを天の父に告白します。²⁷¹ 神の恵みによる赦しをしっかりとつかみます。救いと癒やしを経験します。福音が力と大きな確信と明快さをもって宣べ伝えられるとき、それは人々を光の中へと導きます。²⁷² 人々は、自分が何者であり、神がどなたであるかを知ります。人生の現実をまったく違った目で見ようになります。死からのちへと移るような転換が、神ご自身によって引き起こされるのです。²⁷³

イエスの弟子になる

イエスへの立ち返りは、しばしば一つのプロセスの中で起こります。福音を通してイエスに触れた人は、信仰の小さな一步を踏み出し始めます。イエスに耳を傾け、イエスに信頼し始めます。一つの旅が、成長と学びが始まるのです。弟子であるとは、生徒であること、学ぶ者であることを意味します。それは、この人生において決して終わることのないプロセスです。

266. ペテロの手紙第一4章2～3節

267. 使徒の働き2章37～41節

268. ヤコブの手紙2章19節

269. ローマ人への手紙1章5節、16章26節、ヨハネの手紙第一2章3～4節、3章24節、5章2～3節

270. 使徒の働き11章21節、14章15節、テサロニケ人への手紙第一1章9～10節、ペテロの手紙第一4章3節

271. 使徒の働き19章18～20節、ヨハネの手紙第一1章9節、箴言28章13節、詩篇51篇

272. テサロニケ人への手紙第一1章5節

273. コロサイ人への手紙2章13節、ヨハネの手紙第一3章14節

当時、イエスの弟子たちは、イエスが行かれるところならどこへでもついて行きました。弟子は十二人だけではありませんでした。イエスは師であり、弟子たちはイエスから学びました。弟子たちは、イエスが言われたことを行うことによって、イエスのようになりたいと願ったのです。²⁷⁴

イエスがもう地上におられなくなってからも、イエスを信じる人々はみな、なおも弟子と呼ばれていました。彼らがキリスト者と呼ばれるようになったのは、もっと後のことです。²⁷⁵

弟子としての歩みを始める

弟子としての歩みこそ、私たちに對する神の目標です！ 王であるイエスに従順で、忠実な人々です。その始まりは、ときに目立つものですが、ためらいがちで目立たない始まりであることも珍しくありません。神の御霊は、弟子たちがイエスの言われることを行えるように助けてくださいます。そして、信仰において成長できるように。弟子たちのうちで、福音は、心という良い地に落ちて成長し、実を結ぶ種のように働きます。²⁷⁶ ある人の場合は早く、別の人の場合はもっと時間がかかります。倒れては、また立ち上がる。こうして、新しい霊的ないのちが目に見えるものとなっていきます。²⁷⁷ 福音をますます深く理解していくことは、その中で学びのプロセスであり続けます。それは、単に頭の中のことではなく、それを行い、それを生きることによって起こるのです。

とても大切なことなので、もう一度言います。イエスに従い、弟子となること——それこそが福音の目標なのです。福音は天国への入場券ではありませんし、あの世のことを持ち出して慰めるだけのものでもありません。福音は、すでにこの人生を、今ここで変えるものです。そしてそれは、いつの日か永遠と栄光のうちに続けられ、完成されるのです。永遠のいのちは、すでに今、生きるものなのです！

274. ヨハネの福音書8章31節

275. 使徒の働き11章26節

276. マルコの福音書4章20節、ヨハネの福音書15章8節

277. ローマ人への手紙6章21～22節、7章4節、エペソ人への手紙5章9節、コロサイ人への手紙1章10節、テトスへの手紙3章14節、ヘブル人への手紙13章15節、ペテロの手紙第二1章8節

人が、今やキリストのものとなったことを証しする、外に現れるしるしがあります。洗礼です。²⁷⁸ 洗礼は、これからはイエス・キリストがその人の人生の贖い主であり主であることを、人々の前で、また目に見えない世界の諸力の前で、公に確認し、証印を押すものです。水の洗礼は大きな違いをもたらします。それは立場の転換であり、王であるイエス・キリストへの信仰告白です。洗礼は、イエスと共に歩む人生の一番初めにあるものです。イエスの弟子たちがどれほど真剣であるかを人々が見ることができるように、洗礼は公に行われるべきです。

従う生き方とはどのようなものか

弟子としての生き方とは、どのようなものでしょうか。弟子は、これまでどおり、生活を形づくるあらゆることをします。眠り、食べ、働き、学校に通う、などなど。けれども、内面の姿勢や動機、人生や隣人に対する見方が変わるのです。

ここで、神から来る新しいのちの実として、イエスの弟子たちのいくつかの特徴を挙げましょう。私が挙げることはすべて、試みにさらされており、これからもさらされ続けます。キリストにある新しい存在も、戦いのただ中にあるのです。抵抗は外からだけでなく、内からも来ます。私たちの古い存在、古い習慣、私たちの内にある罪が、再び頭をもたげてきます。そのことに驚く必要はありません。新しいことのすべてが単なる思い込みだったかのように思う必要はないのです。神は助け、私たちの内で働いてくださいます。神の御霊が、助け主として、力として、助ける方として、私たちに与えられているのです。

イエスの弟子たちは、神と隣人と互いを愛します！²⁷⁹ 神の愛は、いつまでも最も偉大なものです！²⁸⁰ その愛に限界はありません。イエスの弟子たち

278. マタイの福音書28章19節、マルコの福音書16章16節、使徒の働き2章38～41節、8章12、36～38節、9章18節、10章47～48節、16章15、33節、18章8節、ローマ人への手紙6章3節、ガラテヤ人への手紙3章27節、エペソ人への手紙4章5節、コロサイ人への手紙2章12節

279. マタイの福音書22章36～40節、ヨハネの福音書13章34～35節、15章13～17節、コリント人への手紙第一13章4～7節

280. コリント人への手紙第一13章13節

は、互いの間にある愛によって見分けられるのです！²⁸¹

弟子たちは、互いに気遣い、互いの世話をします！²⁸² 彼らは一つの家族です。一つの共同体です。それは、定期的に礼拝に出席することだけでなく、生活全体の中で、日常の中で表れます。

イエスの弟子たちは、主の晩餐において、パン裂きにおいて、イエスが自分たちのためにしてくださったことを共に思い起こします。彼らはそれを定期的に、あるいはできるかぎり頻繁に行います。²⁸³ 礼拝のために、教会の建物に頼る必要はありません。霊的な家族として、家々で集まるのです。

イエスの弟子たちは、一人で、また共に、天の父に祈ります！²⁸⁴ まるで神が目の前に見えるかのように、神と語り合います。一人で、また共にささげる礼拝と賛美は、彼らにとって大きな喜びです。²⁸⁵

イエスの弟子たちは、聖書を読みます！²⁸⁶ そのようにして、神と神のみここを知るようになります。そして、神が自分たちに与えてくださったものを知るようになるのです。

イエスの弟子たちは、神の声を聞き、小さなことでも大きなことでも、日常生活の中で神の導きと指示を経験します。

イエスの弟子たちは苦しみを受けます。²⁸⁷ イエスが迫害されたように、彼らにも同じことが起こりえます。それは笑い者にされることやいじめから始まり、世界のいくつかの国々では、今日でも死を意味することがあります。²⁸⁸

イエスの弟子たちは、ほかの人々を弟子とします！²⁸⁹ 福音は、人々を、何か特定のことを信じているだけのキリスト者にするのではなく、日常生活の中でイエスに従う弟子にします。すべてを捨て、日々自分の十字架を負う覚

281. ヨハネの福音書13章35節

282. 使徒の働き11章29節

283. コリント人への手紙第一11章23～27節

284. マタイの福音書6章5～15節、ヨハネの福音書16章26～27節、テサロニケ人への手紙第一5章17節

285. ヨハネの福音書4章23節

286. コロサイ人への手紙3章16節、テモテへの手紙第二3章16節、ペテロの手紙第一2章2節

287. 使徒の働き14章22節

288. ヨハネの福音書15章18～20節

289. マタイの福音書28章18～20節

悟があり、ほかの人々を弟子とすることを人生の目標としている弟子にすることです。それこそ、ほかでもない、イエスが望まれたことです！²⁹⁰ イエスの弟子たちは、人々のところへ出て行きます。自分たちの殻に閉じこもることはしません。

聖書は、成長と認識のプロセスについて語っています。²⁹¹ キリスト者は完璧ではありません。キリスト者もまだ罪を犯します。しかし、罪はもはやキリスト者を支配してはいません。²⁹² 彼らは、もう罪を犯したいとは思いません。彼らは、神が与えてくださった包括的な赦しの中に生きています。これから犯すであろう罪についての赦しの中にもです。²⁹³ 彼らは自分の罪を認め、それを天の父に告白します。互いに対して罪を犯したときには、互いにも告白し合います。²⁹⁴ 彼らは恵みの下に生きており、²⁹⁵ 律法の下にはいません。²⁹⁶ 彼らの目標は、十戒を守ることではありません。イエスと共に歩む人生は、これらの戒めが求める以上のところへと進んで行きます。それは、聖霊が私たちの内に生きておられるからこそ可能になるのです。

彼らは聖霊を受けています。²⁹⁷ 聖霊は彼らの内に住み、彼らを導いてくださいます。御霊の良い実が目に見えるようになること、それが聖霊の目標です。²⁹⁸ これらの実は、何よりも互いの関わりの中に現れます。愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。全体として、それはイエスが生きられたものです。イエスのようになること、それが新しい人生の目標です。²⁹⁹ それは神の実であり、私たちが神に信頼するとき、神が私たちの人生の中に生み出し、育ててくださるものです。聖霊は、イエスに従うための力です。³⁰⁰ この御霊は、私たちの人生における神の人格的な臨在であり、神

290. ルカの福音書14章26～27、33節、使徒の働き14章21節

291. ヨハネの福音書3章30節、コロサイ人への手紙1章10節、テサロニケ人への手紙第二1章3節、ペテロの手紙第二3章18節

292. ローマ人への手紙6章12～14節

293. ヘブル人への手紙10章14節、ヨハネの手紙第一1章5節～2章2節

294. ヤコブの手紙5章16節

295. 使徒の働き13章43節

296. ローマ人への手紙6章14節

297. ヨハネの福音書7章39節、14章17節、コリント人への手紙第一2章12節、6章19節

298. ガラテヤ人への手紙5章13～26節

299. コリント人への手紙第二3章18節

300. 使徒の働き13章52節、ローマ人への手紙8章12～17節

がそこにおられるということなのです。これは本当にすごいことではありませんか。御霊は、相談相手であり、コーチであり、トレーナーであり、助け手であり、導き手でもあるのです。もしイエスがここで私たちと共に地上におられたらなさったであろうことを、御霊はまさにそのとおりに行ってくださいます。

神の御霊は、弟子たちに賜物を授けてくださいます。それによって、弟子たちは互いに仕え合うことができるのです。³⁰¹

弟子としての歩みは、ぬるま湯の講座でも、気楽な散歩でも、ひじ掛け椅子に座ったままのキリスト教でもありません。それは、イエスのように生き、イエスのように仕えることを意味します。それは、責任を伴う新しい人生のモットーです。イエスの弟子にとって、神の国と神の義が、いつも第一です。それ以外のことはすべて、私たちの父が面倒を見てくださる、とイエスは言われます。³⁰²

イエス以外のだれも、**わたしについて来なさい！**と言う権威を持ってはいません。イエスが私たちを呼ばれるとき、私たちは「いいえ」と言うことができるでしょうか。

それは楽な道ではないでしょう。イエスは、費用を計算するようには言われません。³⁰³ 最初の向かい風ですぐに消え去ってしまうことのない、しっかりとした、本物の、よく考えた決断をするためです。いのちに至る道は狭く、上り坂です。滅びに至る広い道は、ひとりでに進んで行きます。今のままでもい続ける以外に、何もする必要がないのです。³⁰⁴

イエスに従う者としての、戦いと試みに満ちた私たちの人生全体について、次のことが言えます。神は、ご自分の子どもたちを、どんな時にも、御子を彼らのために渡されたあの瞬間と同じように愛しておられるのです。³⁰⁵

301. コリント人への手紙第一12章、ローマ人への手紙12章3～8節

302. マタイの福音書6章33節

303. ルカの福音書14章28節

304. マタイの福音書7章13～14節

305. ヨハネの福音書16章27節、17章23節

福音を無視する

福音は脅しの知らせではありません。それは喜びの知らせです！ 福音は、悔い改めと信仰によって、神への道、赦しへの道、自由への道、いのちへの道、意味への道を開きます。

しかし、福音はどうしてもよいものではありません。数ある真理の一つではないのです。この知らせを聞く人は、決断を迫られています。軽々しく扱うべきではありません。結局のところ、この知らせは私たちを救い、守ろうとしているのですから。

森林火災や、ハリケーンや、汚染された飲み水や、ダムの決壊を警告する知らせを想像してみてください。単に警告するだけでなく、逃げ道と避難場所を示してくれる知らせです。その知らせを、どれほど真剣に受け止めるべきでしょうか。もし誤って、それは大げさだ、真実ではない、あるいはほかの人に向けられたものにすぎない、と思い込んだとしたら、どうなるでしょうか。

すべてが明るみになる

イエスの弟子たちは、よみがえられた世界の主を証しすることによって、福音を宣べ伝えました。³⁰⁶ 彼らは、この方に信頼し、自分の罪を告白し、生き方を変えるなら、この方において赦しが得られることを宣言しました。同時に彼らは、すべての人がこの主の前で申し開きをすることになる日が来ることを、そしてその日がしっかりと定められていることを、いつも強調していました。イエスは、すべての人の審判者です。だれもがこの方の前に立つことになります。顔と顔を合わせて。イエスの父である神が、イエスにさばきをゆだねられたのです。³⁰⁷

私たちは、自分が行ったこと、語ったこと、考えたことのすべてについて、申し開きをすることになります。ですから、これは自分の人生について考えなさいという警告なのです！ 自分のしていることが神に喜ばれているかど

306. 使徒の働き4章2節、8章12、25、35、40節、11章20節、17章18節

307. ヨハネの福音書5章22～29節

うかを、よく考えなさいという警告です。すべてが——例外なく、すべてが——明るみに出ることを考えると、あなたはどう感じますか。私たちがひそかに考え、ひそかに行ったこと、人に対して行ったこと、そして怠ったことも。

私たちの奥深く、心と良心の中で、私たちはみな、自分が罪を犯したことに気づいています。神が決して良しとされないことが何であるかを知っています。想像してみてください。私たちは、この一週間の自分の思いや感情を、この一週間に関わったすべての人の前で、スクリーンに映して公開する覚悟があるでしょうか。おそらく同意しないでしょう。自分の胸にしまっておきたいことがいくつもあるからです。人の前でさえ恥ずかしく思うことがあるのなら、聖なる神の前ではなおさらではないでしょうか。

人間である私たちと神との関係における罪の問題は、聖書の中で決して軽く扱われることはありません。どうひっくり返して見ても、それこそが核心の問題なのです。喜ばしい知らせはこうです。キリストのうちにある人は、断罪を恐れる必要がありません。³⁰⁸ 私たちが赦されているなら、もはや神に出会うことを恐れる必要はありません。神はキリストにおいて、私たちをご自分の子どもとしてくださいました。ご自分の息子、娘としてくださったのです。³⁰⁹ 神の完全な愛は恐れを締め出します！³¹⁰

でも、もし私が福音を拒んだら、どうなるのでしょうか。神は、だれにもご自分の知らせを押しつけることはされません。神は人間に決断をゆだねられます。それと同時に、この知らせについて人を納得させるために、あらゆることをしてくださるのですが。神は人の心を探し求め、人の心を納得させるために戦っておられるのです。³¹¹

おぼれかけている人に救命浮き輪が投げられる場面を考えてみてください。だれも、おぼれている人を無理やり救おうとしている、などと言い出したりはしないでしょう。もし人が、自分が失われていることを認めないなら、福

308. ローマ人への手紙8章1節

309. ヨハネの福音書1章12節

310. ヨハネの手紙第一4章16～19節

311. ルカの福音書19章10節

音はその人にとって何の意味も持たないでしょう。けれども、神の御霊は福音のうちに働いて、人々に罪を認めさせてくださいます。³¹² 神のことばには、人の心を開く力があるのです。³¹³

しかし、幻想を抱くべきではありません。福音なしでは、キリストなしでは、私たちは失われており、すでに神の怒りの下にあるのです。中立地帯は存在しません。キリストのうちには断罪はありません——キリストなしでは、私たちは当然のこととして断罪されることになるのです。

もし「いいえ」のままであるなら、その人はその結果を背負って生きていくことになります。罪と罪責を抱えたまま、独りで取り残されるのです。あらゆる動機を見抜いておられる方の前で、どのように弁明しようというのでしょうか。いったい弁明などできるのでしょうか。

神は愛です！³¹⁴ しかし、神は光でもあります。まったく聖なる方です。³¹⁵ 神の知らせを拒む決断をする人は、神に、イエスに、そして神がその人のために愛から行き、すべての人に無償で差し出しておられるすべてのものに、「いいえ」と言っているのです。イエスはあるとき、こう言われました。

わたしの味方でない者は、わたしに敵対する者です！³¹⁶

神の怒り

神の怒りという現実を指摘しないとしたら、それは助けを必要としている人を見捨てるようなものでしょう。³¹⁷ 罪に対する神の徹底した嫌悪を指摘しないとしたら、です。神の心の奥底は、罪によって傷ついています。神は悲しんでおられます。³¹⁸ ご自分の人々が神なしに生き、神がいなければ悲惨へ向かうことに気づいていないからです。神の愛が感情なしには考えられず、

312. ヨハネの福音書16章8節

313. ヘブル人への手紙4章12～13節

314. ヨハネの手紙第一3章1節、4章7～8、16節

315. ヨハネの手紙第一1章5節、ヨハネの黙示録4章8節

316. マタイの福音書12章30節

317. ヨハネの福音書3章36節、ローマ人への手紙1章18節、2章5、8節、3章5節、5章9節、エペソ人への手紙2章3節、5章6節、コロサイ人への手紙3章5～6節、ヨハネの黙示録6章16～17節、11章18節

318. マルコの福音書3章5節

理解されないのと同じように、神の怒りもそうです。しかし、この怒りもまた純粹で聖なるものです。激情ではありません。人間の罪に対する非合理度を越した反応ではありません。神は怒るのに遅い方です！³¹⁹ 私たち人間とは違います。

神の怒りとは、神が人間を、その罪の結果と影響とともに、その人自身にゆだねてしまわれることを意味します。³²⁰ 置き去りにされること。自分で作り出したあらゆる問題を抱えたまま、失われていること。そんなことを経験したい人はだれもいません。

怒りとは、裁きの日に、自分の罪を抱えたまま、神の栄光に満ちた聖さに向き合うことを意味します。神の怒りとは、私たち人間が人々に対して、また神に対して犯す罪への、神の応答なのです。

もし神が怒らないなら、神は神ではないでしょう。あらゆる形の悪を耐えがたいとするご自分の愛を、否定することになるでしょう。結局のところ、何にでも「はい」と言う神を望む人はいません。人間が正義を保証できないのなら、私たちにはもう神に望みを置くことしか残されていません。しかしそれは、ほかの人たちだけに当てはまるものではありません。だれもが、自分自身について申し開きをすることになるのです。

キリスト者は、和解を望まれる神の御心を証しします。³²¹ 自分自身が、神をそのような方として知ったからです。³²² しかし神は、私たちの基準を受け入れる飼いならされた神ではありません。私たちの不正に対して沈黙されることはありません。あるいは、ただ見過ごされることもありません。神は正義を行われます。私たちの可能性や今日の考えをはるかに超える、ご自分のやり方で。

319. 出エジプト記34章6節

320. ローマ人への手紙1章26節

321. コリント人への手紙第二5章19～20節

322. コリント人への手紙第二5章11節

神とその良い知らせに「いいえ」と言う人は——もしかすると何度も——自分で自分の心をかたくなにします。そうして人は失われるのです。³²³ 失われるのは、神がこの「いいえ」を重い心で受け入れられるからです。失われているとは、本来いるべき場所、いることのできた場所にいないということです。家にいるのではなく、孤独で、根を失っていることです。神とのつながりが断ち切られているのです。最後の最後まで一人ひとりを追い求め、家に連れ帰ろうとされる神とのつながりが。³²⁴

福音を拒む人はだれでも、自分の罪に対する正しい判決を受けることになります。³²⁵ その裁きは完全に正しいものです。³²⁶ 人は自分が蒔いたものを刈り取ることになります。神は侮られるような方ではないからです。³²⁷ 真理と福音に従わず、頑なに逆らい続けた人は、怒りと憤り、苦難と苦悩を経験することになります。³²⁸ 時にはすでにこの人生において、しかし死後には確実に。償われていない自分の罪を直視し、自分自身の罪にもう一度向き合うとは、そのように感じられることでしょう。今度は神の視点から。そして、自分が不当な扱いをした人々の視点から。

永遠のいのちと地獄

イエスは、栄光に満ちた永遠のいのち³²⁹と、永遠の火と永遠の刑罰について語っておられます。³³⁰ 福音に従わない人々がいる外の暗闇について語っておられます。³³¹ 泣いて歯ぎしりすることについて語っておられます。³³²

323. ローマ人への手紙2章12節、コリント人への手紙第一1章18節、15章18節、コリント人への手紙第二2章15節、4章3節、テサロニケ人への手紙第二2章10節、ペテロの手紙第二3章9節

324. ルカの福音書15章4、24節、ヨハネの福音書3章16節、ペテロの手紙第二3章9節

325. コリント人への手紙第二5章10節

326. ヨハネの黙示録20章11～15節、21章8節

327. ガラテヤ人への手紙6章7～8節、民数記32章23節

328. ローマ人への手紙2章5～11節

329. ヨハネの福音書3章36節、5章24節、6章47、51節、10章28節、11章26節、ローマ人への手紙5章21節、6章23節、ヨハネの手紙第一2章25節、5章11、13節

330. マタイの福音書25章34、41、46節

331. マタイの福音書8章12節、22章13節、25章30節、ヨハネの福音書8章12節、12章46節

332. マタイの福音書8章12節、13章42、50節、22章13節、24章51節、25章30節、ルカの福音書13章28節

実際、地獄についてたびたび語られるのはイエスです。愛そのものである方が、だれよりも多くそれについて語られたのです。³³³

新約聖書の実語であるギリシア語で地獄を表す言葉は、**Gehenna**（ゲヘナ）です。当時、これは実在の場所で、エルサレム近くの谷でした。イエスの時代にはごみ捨て場で、火が絶えず燃えていました。イエスは預言者エレミヤにも言及しておられます。エレミヤは同じ谷をベン・ヒノムと呼んでいます。³³⁴ この場所は偶像礼拝で知られており、そこでは子どもたちまでいけにえとしてささげられました。つまり、恥と罪の象徴です。だからこそ、裁きと滅びの象徴でもあります。破滅と死の象徴です。

今までどおり生き続けたい人、罪の中にとどまり続けたい人は、そうすることで、いのちに背を向ける選択をしているのです。その人は、永遠のいのちの栄光から締め出されたままです。それは、神の新しい世界における、すべての神の子どもたちのいのちであり未来です。³³⁵

地獄は、警告として、激しいイメージで描かれています。聖書はそれについて沈黙していません。それどころか、切実に警告しています。地獄は「大罪人」だけのためのものではありません。ヒトラー（Hitler）やスターリン（Stalin）や毛沢東（Mao）のような大量殺人者だけを思い浮かべないようにしましょう。サディストや子どもを性的に虐待する者だけを考えないようにしましょう。神は、彼らに対する判決を、私たちの基準では何も、あるいはほとんど罪を犯していないような人に対する判決と同じように、正しく定められます。聖書ははっきりと言っています。**すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができない、と。**³³⁶

地獄が人間にとって具体的に何を意味するのかについて、イエスも聖書も沈黙しています。ですから、空想は場違いです。イエスの言葉だけで十分な警告です。

333. マタイの福音書5章22～30節、10章28節、18章9節、23章33節

334. エレミヤ書7章31節、19章2～7節、32章35節、イザヤ書66章24節

335. ヨハネの黙示録21章8、27節、22章15節

336. ローマ人への手紙3章23節

あなたは地獄について、さまざまな意見を耳にするでしょう。地獄など存在しない、と言う人がいます。失われた人々はそこで最終的に滅ぼされる、と考える人もいます。また、人は清められるために限られた期間だけそこにいて、その後に結局は永遠のいのちに入るのだ、と言う人もいます。このことについて聖書を読み、脚注にある箇所を開いて調べてください。最悪の場合、最悪のケースを前提にしてください。苦い失望を味わうより、良い意味で驚かされるほうがよいのです。

神は人間の「いいえ」を尊重されます。それが神を痛ませ、イエスがエルサレムのために嘆かれたように神が嘆かれるとしてもです。³³⁷ 彼らは神から切り離され、自分の拒絶と罪の結果を負うことになります。聖書はこれを**第二の死**と呼んでいます。³³⁸ 彼らは神なしで生きたいと望みました。そして今、それが永遠に続くのです。「地獄には志願者しかいない」という言葉は真実です。³³⁹ 人は、死を選ぶか、いのちを選ぶかという選択の前に立たされているのです。³⁴⁰

今日こそ救いの日です——明日ではありません！

異なる福音

福音は真理のことばです。³⁴¹ 神の真理です。福音が広まれば広まるほど、もはや原典と一致しない版が現れてきました。すでに紀元1世紀に、イエスから宣教を託された使徒たちは、福音の偽物について警告しています。³⁴² それらは本物に似ており、見分けがつかないほど本物そっくりのこともあります。

337. マタイの福音書23章37節

338. ヨハネの黙示録2章11節、20章6、14節、21章8節

339. この考えはC・S・ルイス (C. S. Lewis) にさかのぼります。地獄の扉は内側から閉ざされている、というものです (『Über den Schmerz』〔『痛みの問題』〕)。

340. 申命記30章15～19節

341. ガラテヤ人への手紙2章5、14節、エペソ人への手紙1章13節、コロサイ人への手紙1章5節、テモテへの手紙第一2章4節

342. コリント人への手紙第二11章1～4節、ガラテヤ人への手紙1章6～9節

同じように、本質的なものを省いたり、付け加えたりした、切り詰められた版もあります。誤った版、人を惑わす版もあります。見分ける手がかりとして、次のような例を挙げましょう。

福音は一貫して、私たちが自分で自分を救うことはできないと示しています。自分を改善しようとするどんな試みも、見込みがありません。神の律法を守り、良い行いによって神に受け入れられようとする試みは、失敗に終わります。³⁴³

同じように、神の恵みを少しだけ受け取り、自分の良い行いを必要な補いとして付け加えることも、うまくいきません。恵みと行いによる義とを混ぜ合わせたり、補い合わせたりすることです。何かを自分の力で得たいと思うのは、どこか人間の本性の一部なのです。恵みを受け入れることは難しいものです。しかし、それこそが福音なのです！

その一方で、この神の恵みを価値のないもの、安っぽいものにしてしまうこともできます。福音を自分のものとして受け取りながら、生き方を変えない人——聖書はこの変化を悔い改めと回心と呼んでいます——は、福音を誤解しています。福音は、自己中心と罪深い自己実現の生活を送るためのフリーパスではありません。³⁴⁴ 生きた信仰は、必ず生き方の根本的な転換へと導きます。³⁴⁵ それは、キリストが主であり支配者である新しいいのちへと導きます。³⁴⁶ 新しいいのちは、罪のないものではありません。地上の体にあるかぎり、決してそうはならないでしょう。しかし、そこには「以前」と「以後」があります。小さな、あるいは大きな行いや言葉の中に見えてくる変化があるのです。良い行いは、信仰そのものと同じように、キリスト者の生活に欠かせないものです。良い行いのない信仰は死んでいます。本物の信仰があるところでは、それは良い行いの中に見えるようになります。これは行いによる義ではありません。良い行いは、新しいいのちの証拠なのです。

343. ローマ人への手紙3章20、28節、ガラテヤ人への手紙2章16節、3章10節

344. ローマ人への手紙6章1節、ペテロの手紙第二1章9～11節

345. ヤコブの手紙2章18～26節

346. ペテロの手紙第二2章1節、ユダの手紙4節

真の福音には、付け足しは必要ありません。イエスだけ、ほかには何もいない——これがメッセージです。

ですから私たちは、新約聖書が描いているとおりに福音を守るべきです。³⁴⁷
ゆがめられた福音は人を救いません！

福音ではないもの

福音は、ある教会や教派の宣伝ではありません。教会が何の役割も果たさないということではありません。あらゆる教派のキリスト者が、多かれ少なかれ福音を伝えているのです。教会は、信仰に至るすべての人にとっての家であり、ふるさとです。

福音は、何よりもまず世界を改善するためのプログラムとして自らを理解しているではありません。もっとも、多くの場所で、それに大いに貢献してはいます。むしろそれは、心を変えるためのプログラムです。イエスの多くの弟子たちの隣人愛によって、多くの人が助けられています。病院、児童養護施設、奴隷制度の廃止は、人々の中で形をとる神の愛の証拠です。キリスト者は塩のように働くべきです。³⁴⁸ 不正を——世界規模の不正も——はっきりと指摘し、正義のために立ち上がるべきです。

キリストの十字架による一人ひとりの救いは、社会に影響を与える革命的な力を解き放ちます。十字架のメッセージこそ、世界をより良く変えることのできる唯一の力です。そして、それができることを証明してきた唯一の力です。今こそ、キリストの十字架がもう一度、大きな声ではっきりと宣べ伝えられるべき時です。

実際の生活において、福音は、イエスがなさったように行動することの中に現れます。与え、助け、守り、解放し、告白する備えがあること。愛すること！多くの場所で、何かが良い方向へと変わっています。福音によって変えられた人々を通してです。神はご自分の民を通してこの世界で働いておられます。そしていつの日か、すべてを新しくしてください。世界を変え、

347. ユダの手紙3節

348. マタイの福音書5章13節

造り変え、その政治的・社会的・経済的な問題を解決することは、弟子たちの肩にかかっているではありません。それは、イエスが私たちに託された務めや使命ではありません。

御国の弟子たちの中に、その交わりの中に、神の新しい世界はすでに始まっています。彼らは御国の福音を宣べ伝え、人々を弟子とします。それこそが、彼らが暮らす社会に対する最も効果的な影響なのです。

福音はまた、個人の生活を向上させるためのプログラムでもありません。あるいは、豊かになるためのプログラムでもありません。自己最適化でもありません。それは、私たちにはできなかったことを神が行い、成し遂げてくださったという知らせです。この岩の上に、私たちは人生を築きます。私たちの救いは、イエスが十字架の上で叫ばれた言葉の上に安らいでいます。「完了した」！ 私たちはそれに「はい」と言い、感謝して受け取ります。

しかし、繁栄や富は、決して福音の約束ではありません。排斥や迫害のために、キリスト者は時に、隣人たちよりも苦しい状況に置かれることさえあります。それでも彼らは、いつも共にいて養うと約束してくださった神に頼ることができます。

終わりに

これは、世界で最も良い知らせの概観にすぎません。人を立ち上がらせる知らせです。赦しと受け入れを与える知らせです。イエスを通して人を自由に、勇気を与える知らせです。

この知らせは、あなた個人に何を語っているのでしょうか。あなたの心に何を語っているのでしょうか。もしかすると、あなたは今ほど近くにいたことはないのかもしれませんが。今日こそ救いの日です——明日ではありません。明日では遅すぎるかもしれないのです。

福音は、硬貨や小額の紙幣で払い出される一枚の高額紙幣のようなものです。この知らせの内容をますます深くつかみ、理解していくには時間がかかります。それは小さな、時には大きな歩みの中で起こります。私たちがイエ

スに従っていく間に。日々の生活の中で。本当の理解は、信仰と従順の一步一步によってのみ深まっています。つまり、イエスが言われることを私たちが行うときにのみ、です。

福音は、神が救いの歴史へと転じられた世界の歴史の中心に立っています。

パウロは、ローマの信者たちに福音を宣べ伝えたいと願っていました。³⁴⁹ 彼らはすでに長く信仰の道を歩んでいたにもかかわらずです。パウロは、福音の偉大さ、その及ぶ範囲、そして私たちの地上の生活と永遠にとってのその結果を示したいと思っていました。彼はそれを書き記しました。ローマ人への手紙です。福音の記念碑です。

この手紙を読んでください！

これからどうするか

神があなたについて、そしてあなたに直接語ってくださったすべての良いことを、神に感謝してください。

質問があれば、私に書いてください：hj-ronsdorf@t-online.de

ほかの本や文章、説教は、私のホームページでご覧いただけます：
www.hans-joerg-ronsdorf.de



ここで、いくつか大切なヒントを挙げておきます：

- 聖書を読んでください。できれば定期的に。

349. ローマ人への手紙1章1～5、9、15～17節

- ほかの人たちと一緒に聖書を読んでください——そして、それについて語り合ってください。
- 神がご自分のことばをあなたにとって生きたものにしてくださるよう祈ってください——まるで神があなたに直接語りかけておられるかのよう
- 聖書の箇所を、できれば声を出して、何度も読んでください。

聖書の箇所に、次のような問いを投げかけてください：

- この箇所にどんな見出しをつけますか。
- この箇所は神とイエスについて何を語っていますか。
- この箇所は人間について何を語っていますか。
- この箇所から何を学びますか。
- 私たちは何をすべきでしょうか。
- このみことばは、どのように私たちを励ましていますか。

一緒に祈ってください。また集まったときには、自分の経験や出来事について話し合ってください。

イエス・キリストを愛し、あがめ、聖書を大切にし、読み、真剣に受け止めているキリスト者とのつながりと交わりを求めてください。



イエスの福音は良い知らせなのでしょうか。それはいったいなぜでしょうか。

少し時間を取って、さまざまな角度から福音の独自性を発見してください。

シンプルでわかりやすく、ここでは全体像が語られています。